

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

第55号

2025年2月28日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1
TEL (0980) 87-6257

目 次

小浜島の概要	(仲盛長儀) 1
小浜島 一果報ぬ島・ちゅらさんの島—	(仲盛長儀) 3
「公民館に関する書類綴 小浜公民館 平成二年度」について ...	(花城正美) 10
『琉球諸島採訪記 一崎原恒新ノート』にみる小浜島関連記事	(崎原恒新) 20
解題 『琉球諸島採訪記 一崎原恒新ノート』	27
小浜島に関する資料	30
浦内公民館の活動 一学校5日制と地域の課題を中心に—	(田代 馨) 45
追悼 玉城功一先生のご逝去を悼む	(石垣久雄) 52
坂の下のマホロバ	(西前津松市) 54
令和6年度受入資料	55
第48回町史編集委員会報告	62
令和6年業務報告	68
ドキュメンタリー映像	
「アジアはひとつ」竹富町上映会について	71
編集後記	73

●〈表紙〉「ちゅらさん」小浜島ロケ●

NHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」の小浜島ロケが始まったのは2000年11月。表紙の写真は2000年12月5日付の『八重山毎日新聞』の記事「『ちゅらさん』ロケ順調に進む小浜島」で用いられたもの。キャプションに「小浜島のお墓の前でテスト演技を行う平良トミさん(左)、国仲涼子さん(中央)、田中好子さん(右)」とある。

提供・八重山毎日新聞社、協力・NHK沖縄放送局八重山支局。

小浜島の概要

竹富町公民館連絡協議会指導者研修会資料

平成 16 年 12 月 17 日 於・竹富島まちなみ館

仲 盛 長 儀

はじめに

小浜島は、「八重山の臍」とも言われ、石西礁湖の中央に位置している。石垣島の南西に浮かぶ周囲 16.6 キロメートル、面積 7.8 平方キロメートルの島である。島のほぼ中心部に標高 99.4 メートルの大岳（うふだき）があり、なだらかな丘陵を成し、風光明媚な島として知られている。人口は 540 人余で、小浜小中学校（生徒数 19 名、教職員 22 名）が在籍している。古くから稲作と豆、竹、そしてサトウキビの栽培が盛んで、「果報ぬ島」と呼ばれている。サトウキビの生産は、年間平均 4500 トンをあげている。近年は様変わりして、農業はサトウキビ、牧畜が中心である。和牛飼育頭数は 891 頭。

その他、リゾート施設（はいむるぶしが 120 室、南西楽園が 40 室、コーラルアイランド）、ゴルフ場がつくられ、2001 年（平成 13）に放映された NHK 連続テレビ小説「ちゅらさん」のロケ地として全国的に知られ、その効果もあって、観光入域も増大している。交通について、船便は 1 日に、八重山観光フェリーが 10 便、安栄観光が 8 便ある。島内にはバス会社「小浜島交通」がある。

なお、島の南西に位置する細崎には、1910 年（明治 43）頃より鰹漁を求めて、糸満漁師が中心に入植して集落を形成した。

小浜公民館の概要

1957 年（昭和 32）4 月に、小浜部落会を小浜公民館とし、以来 47 年経過した。2000 年（平成 12）2 月、地縁団体の認可を得た。現在、館員数（館費納付者）は 189 名（143 戸）である。公民館は、老人会（第 1、第 2、常盤会）、婦人会、青年会、子供会、生活改善グループで組織される。総会が最高議決機関である。運営評議会は、学識者若干名、各団体代表、役員で構成されている。

〈役員会組織表〉

公民館長	総会で選出。
副館長（神事）、理事（渉外）、幹事（会計）	南北評議会で選出。
監査 2 名	総会で選出。
その他	産業部 2 名、総務部、社体部、教養部、自警部がある。 産業部以外は館長の推薦があり、評議会の承認を得て決定。

小浜公民館平成 16 年度活動報告

月	活 動 内 容
4 月	・ 2 日 第 1 回役員会。 ・ 6 日 総会決議事項の要請 (竹富町長、他)。 ・ 19 日 第 2 回役員会。 ・ 26 日 第 3 回役員会。 ・ 27 日 第 1 回評議委員会 (年間事業計画、公民館費、他)。
5 月	・ 12 日 第 4 回役員会。 ・ 21 日 春の清掃検査。 ・ 27 日 公民館費徴収。 ・ 30 日 公民館親睦運動会。
6 月	・ 2 日 大願い (祭事)。 ・ 13 日 第 3 回「ちゅらさん祭」開催。 ・ 20 日 竹富町球技大会参加 (ソフトボール優勝、総合 3 位)。 ・ 21 日 細崎公民館主催「海人祭 (ハーリー)」参加。 ・ 26 日 やしの実大学講座受け入れ。 ・ 28 日 内閣府地域活性化事業意見交換。
7 月	・ 3 日 八重山郡民体育大会参加。 ・ 6 日 小浜成人大学講座開講式 (→ 3 月)。
8 月	・ 2 日 豊年祭 (祭事)。 ・ 15 日 NHK「ちゅらさん 3」のスタッフとの懇親会。
9 月	・ 1 日 旧盆後の道路、および大岳の清掃。 ・ 6 日 第 5 回役員会。 ・ 11 日 大盛武竹富町長就任激励会。 ・ 16 日 第 6 回役員会。 ・ 18 日 八重山郡陸上競技大会参加 (→ 19 日)。 ・ 20 日 敬老祝賀会 (祝辞)。70 歳以上 138 人。 ・ 29 日 青年会主催「十五夜綱引き、のど自慢大会」に協力。
10 月	・ 13 日 第 7 回役員会。 ・ 31 日 竹富町民運動会参加。第 4 位。
11 月	・ 12 日 第 8 回役員会。 ・ 16 日 結願祭 (祭事)。
12 月	・ 6 日 古謡「アヨー」の練習 (→ 7 日)。 ・ 9 日 種子取祭。 ・ 15 日 第 9 回役員会。 ・ 17 日 竹富町公民館連絡協議会研修会参加。 ・ 22 日 評議委員会。
1 月	・ 2 日 新年・成人・生年合同祝賀会 (祝事)。 ・ 3 日 新春球技大会。
2 月	
3 月	・ 31 日 平成 17 年通常総会。

小浜島 一果報ぬ島・ちゅらさんの島一

2002 年『琉球新報』「南風」欄より

仲 盛 長 儀

ちゅらさんの島、小浜島

2002 年（平成 14）1 月 11 日付

巳年の昨年の年末は、「ミックァー、ハプーワウヌ」（目の不自由な人は、ハブを驚かないの意）のたとえ、知らないものは怖さ知らずで、執筆を引き受けた。

巳年と言えば昨年前半、NHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」が放映され明るい沖縄のイメージが全国、世界に紹介された。特に主人公・古波蔵恵里の生まれ育ったのが、小浜島という設定で、島では大変な光栄に拝受いたしました。

ストーリーの内容も十分知らず、現地ロケの協力応援をしましたが、気になるのは視聴率でした。終わってみれば、大変な高視聴率に終わって、協力者の一人、また公民館をあずかる者として撮影スタッフ、出演者、原作者の岡田恵和さん、ともどもに喜び感謝いたしています。

ところで撮影に使われた古波蔵荘、二人の植えたガジュマルの木、キジムナーの森など、今なお多くの観光客が訪れ島をにぎわしており、人気のほどをうかがい知ることができます。

今年は復帰三十年。NHK放送を記念してドラマ特選で放映されています。

そこで島、公民館では各組織、団体を網羅した「ちゅらさん島興し実行委員会」を組織し、第二回ちゅらさん祭りを開催することに決定し、島興しの原動力になれば幸いだと期待しています。

時期については昨年の反省を踏まえ、また島の恒例の祭行事を勘案し、五月下旬を目標とし

ています。

いろいろなメニュー、プログラムを組み合わせ、楽しい祭にしたいと思います。おいでください。ちゅらさん島、小浜島へ。

頼もしい島の新成人

2002 年（平成 14）1 月 25 日付

都市地区の近年の荒れた成人式をメディアを通じて見聞きするにつれ、なぜなのか、と疑問を抱かずにはおられない。社会に対する反感なのか悪戯心。それとも困らせて優越感にひたっているのか、問いただしくなります。

昭和五十六年に産声を上げた子供たちが今年成人を迎えたが、島の小中学校を卒業した者は八人。高校は石垣や沖縄本島へ、大学・専門学校は本島、本土へと親元を離れ行く。彼らは休暇、夏の祭りを利用して帰省する。昭和年代までは、成人の日（一月十五日）の当日、成人者の父母と公民館役員のみで、しかもサトウキビ収穫時の農繁期とあって夜間に開催していた。成人式を迎える者はせいぜい一人か二人で、時には主人公不在の寂しい成人式であった。

祝いする者、祝いされる者にとって参加者の多い程、意義深く、いつまでも心にとどめてもらえるのではと、現在は新年、生年祝い、成人式の合同祝賀会を正月二日に開催している。

島の新成人は夢と希望に輝きはつらつとして、元気に満ちあふれ、頼もしく映った。司会から

指名され舞台に上がった新成人の中には、将来の夢や抱負を方言で話す者もいた。ぎこちない話し方だが、真剣な顔は島の方言文化を学ぼうという心がうかがえたのである。

中には本土出身者もいて、親元を離れ小浜島で成人式を祝ってもらい感謝を込めて自己紹介する者、福祉関係の大学に在学中の新成人は将来島に帰りお年寄りの世話をしたい仕事ができたいと抱負を語る者もいた。

保育士、調理師などそれぞれ夢、目標をもって頑張っているのは大変頼もしく新鮮に映った。願わくば彼らの夢の大願成就を願う。

往年の島の物産

2002 年（平成 14）2 月 8 日付

「小浜島数え唄」の四番に、四つとせ世にも名高き豆と竹、これが特有の物産で一と、昭和初頭に詠まれたように大豆と竹、米は島の主な物産であった。特に大豆は「小浜種」と、農林省に品種登録されていたほどで、大豆の栽培は盛んでした。収穫時期になると、児童生徒たちの学級費や PTA 会費の足しにと早起き作業、放課後などはアルバイト作業に出掛けたことが思い出されます。

ところで小浜種については昭和三十四、五年頃まで栽培されていた。その頃から粒の大きい、多収量型の改良種（アンダー系、島では大和豆）が導入され、自然に小浜種は島から姿を消した。さらに昭和三十七年には外資導入で中型（五十㍓）の製糖工場が設立され、換金作物は大豆からサトウキビへと移行した。

その製糖工場も創立から四十年。その間の昭和五十年頃、大豆栽培が一度試みられたが、結実せず失敗した。小浜種の大豆は絶えてしまったか。何とか掘り起こし出来ないものかと心ある方々と常々話していたところ、さすがその道の権威、当地出身の新本光孝琉大教授が探して持ち帰り、一部は地元の大久晃生先輩が大事に

育てています。

発芽率は 60% とのこと。願わくは五月には見事に結実し往年の島の特産が生み出されればと願うものである。

ちなみに小浜種の品種の特性は、草丈は低めで粒は小粒だが、実がしまり豆腐にすると歩留まりも良かった、と年寄りの方々からうかがっている。

近年バイオ技術の発展に伴い遺伝子組み替えの穀物、食料に対する危機感を思うとき、在来、往年の小浜種をいつまでも残し続けたいものです。



壬午年にちなみ

2002 年（平成 14）2 月 23 日付

今年は壬午（みずのえうま）の年。小浜島では、旧暦、正月の初午の日の二月十九日に生年に当たる方の健康、長寿をそれぞれの家庭で祝う。今年も九十七歳のカシマヤーを迎えられた一人をはじめ、八十五歳、古希と多くの方が生年を祝いました。島の男性でカジマヤーを迎えるのは三人目と記憶しています。

さて、干支にちなみ、馬のことに触れましょう。県内で俗に在来馬といえば、与那国馬、宮古馬。この二種は、よく知られていますが、「小浜馬」という在来馬をご存知でしょうか。

車社会になる一昔前までの石垣の農家のお年寄りには、良く知られていた。が、今では無類の馬好きにしか知られていないのが現状ではないでしょうか。

県外にはトカラ馬、木曾馬、北海道の道産子馬をはじめ、外にも在来馬は数種いるようですが、いずれも数が少なくなっている。その要因は不必要につきる。永年にわたり人様のために尽くして来たものの、必要性を感じなくなると、見向きもされないとは、と考えさせられます。

おかげで、在来馬は数が少なくなっている。小浜馬も多分に漏れずです。最近では、小浜馬の血統を継ぐ馬は数頭しかいないとのこと。ここで何とかしなければ、と思う一人です。

宮古馬は心有る方、そして行政のバックアップで、今では三、四十頭に増えていると聞く。小浜馬も何とか増やせないかと思う。

ちなみに小浜馬の特徴と言えば小型で、宮古、与那国馬より少々大きく、胴長、後肢がX型、と聞いている。

小浜馬に興味のある方、一緒に考えて行動してみませんか。学術的にもさることながら、小浜馬を増やして、一昔前のように草競馬をしたいと思う。



うりずんの季節　ーウローンツィぬジラーマー

2002 年（平成 14）3 月 8 日付

- 一、ヘーイヤー　ウロンツィヌ　若夏ヌタツ
タラ
- 二、ヘーイヤー　ストウムディニ　朝パナニ
ウキャウリ
- 三、ヘーイヤー　アンガルムカイ　ピンガ
スィムカイ　ウガミバ

四、ヘーイヤー　ズクヤパナ　アカルカイ
シャ　サキバシ

五、ヘーイヤー　百合ヌパナ　シルサカイ
シャ　サキバシ

六、ヘーイヤー　ウリバミリ　キィムサニ
シャ　アルムヌ

七、ヘーイヤー　クリバミリ　ンニサニシャ
うりずんとは八重山の方言で旧暦二、三月の陽春のことで、小浜ではウローンツィという。今どき、正にウローツィの季節である。この時期になると口ずさみたくなる唄が「ウローツィぬジラーマ」である。島に数ある古謡の中でも、最も代表的なもので、季節感に溢れ、前段の流暢な歌い方、後段の軽快な歌い方には心躍られます。

そのジラーマの意を解くと、陽春の、若夏が立ったら早朝、朝まだきに起きて東方を望むとデイゴ、百合の花が紅く、白く美しく咲いている。それを見て心嬉しくあることよ、との意であり、正に季節感溢れる島の代表的なジラーマです。

ところで、ジラーマとは八重山で一般的に言われているジラバのことで、人頭税に苦しめられた当時、厳しい社会体制のもと、圧制におしひしがれることなく、自らの生活を切り開くため和気藹々と共同作業を行なう結いの中から生まれたと言われています。

今でこそ、その光景は見ることは少なく、唯一公民館役員の交代（ツィンギブリヨイ）で唄うか、結願祭の狂言の中で唄う程度ですが、最近若い皆さんが興味をもちつつあることに期待したい。

年度の初め

2002 年（平成 14）4 月 5 日付

四月ともなれば官公庁、学校や会社などの年度初めに当たるが、動植物や世の万物すべてが躍動する月でもある。島の学校では新しく赴任

する先生、新一年生や中学生の入学式などと、日一日と陽光が明るさ、強さを増すがごとく躍動感あふれる月でもある。

この三月三十一日は年度の最終日。小浜公民館の定期総会の日でもあります。総会を先日終えて四月一日から新年度のスタートとなった。一日は早朝から神前報告、島の長老、関係者や関係機関などへのあいさつ回りと目まぐるしい一日になります。さて、ここで公民館役員の選出について紹介します。

公民館役員の任期は一年で毎年度改選となりますが、島ならではの選出方法があります。館長と監査は総会で選出します。副館長二人、幹事二人、会計二人、事業部二人、評議員四人については、南北両部落から選出し総会の承認を得ることになります。南北両部落の予選会の中主（ナカス・部落の中心的世話人）が中心となり部落民を招集します。そこで役員に当たるべき方を紹介し承認を得、さらに総会で承認を得ることになります。毎年のごとく中主にはご苦労願っているのである。

この制度、方法は小浜ならではの制度ではないでしょうか。そして総会終了後はさらに両部落の中主主催で引き継ぎ祝いと称し長老、総裁、顧問役ら、そろいの上で、旧役員に対し慰労と新役員への激励をするのである。そのことが方言で「ツィンギブリヨイ、引き継ぎ祝い」というのである。

祝い座では、唄・サンシンは付き物だが、昔は、この時期にサンシンを弾くことは慣習的に出来なかった。そこで、「ウロンツィぬジラーマ」を唄うのである。

竹と横笛

2002年（平成14）4月19日付

小浜島には、何時の時代より植林されたか定かではありませんが、竹が栽培され、ひところは島の経済を潤し重宝された時代もあった。

それは竹が建築材として利用され沖縄独特の瓦葺き屋根であれ、茅葺き屋根であれ、家を建築するにあたっては、なくてはならない貴重な材料であったからである。瓦や茅の下地になるユツル竹、床になる竹、茅を押さえる竹、雨戸代わりのトゥルクビ（壁）などにいたる所で利用されている。その他ピキダー用、物干し竿、玩具、民具、海人の使用するモリの柄、船をあやつる竿、鯉のぼりを揚げる竹等、利用範囲を挙げれば計り知れない。

ちなみに島にある竹の種類と言え、正確な品種名は定かではありませんが島の俗称で挙げますと、ダイモー竹、真竹（マーンダキ）、ンガンダキ、ハタカラ竹（チンブク）などがあります。なかでもダイモー竹は面積が大きく、利用範囲も広く、出荷量のトップの座を占めていた。

しかし、今では竹に代わる化学製品や輸入材木に圧され、島の竹は出荷しなくなり竹林は荒廃化し、一部の竹林のみ利用している状況である。その中でも横笛用の材料である竹は節の長い良質の竹が島にはあり、その恩恵を受け横笛の奏者や好きな方がよく材料調達に来る。

横笛と言え、沖縄の芸能には欠かせない楽器である。特に八重山の民俗芸能には欠かせない楽器である。島においてもしかりです。祭の中で笛の奏者の役割は大きく、また子供達の憧れでもある。その環境の中で育った子供達は自然と笛を作り、笛に親しみ後々には奏者として活躍する。それは芸能コンクール（笛の部）に挑戦する者の中に占める島出身の割合（三、四割）から見ての通りである。いつまでも残したい島の竹です。

祭祀と五穀豊穡

2002年（平成14）5月17日付

先日、ウー（大）願いを済ませた。大願いとは稲穂の開花結実、粒揃いの祈願であり、豊作祈願である。最近の稲はバイオなど技術の進展

に伴い多種多様であり、在穂期間も早稲から遅稲までさまざまである。一昔前までの島の稲の栽培は遅稲穂のみである。

稲の栽培と祭祀、神行事とは一体である。稲作体系からみた祭祀行事を列記してみると種子取祭、ファバァ（草葉）願い、ムネー願い、うー願い、豊年祭、十五夜、結願祭。年間を通して祭祀、行事が前述の他にも細々とした祭祀、願いがある。

稲の播種の時期ですが、古老や神前奉納芸能（狂言）の言葉から伺える事は「夏水ニチキティ 冬水ニウローシ」。温かい水に浸して、冬永とは旧暦・十一月、十二月に播きなさいとの意であり理にかなっている事である。

栽培体系から月（旧暦）を追って見ると、十月・種子取祭、旧正月、初願い、二・三月・草葉願い、四月・うー願い、六月・豊年祭、八・九月・結願祭と、七月を除き神行事がある。

それは天地、自然界の災害より作物を守り育てることから先人の創り出した農耕文化ではなかろうか。科学の進歩などで、社会の変化が著しく、価値観が多様化した現代の世の中に必要論者もおるかも知れないが、その事が基礎となり色々な文化が生まれる。そして地域の結いの精神、結束力、共同意識が育まれ、地域の発展につながる事と信じる。

何はともあれ今島の稲は出穂の盛りであるが、今年は干ばつで雨が少ない。先日願った事は粒が生え揃い、実入りが良く黄金色に捻ること。

願わくば、願いが通じて夏には「粒美らさあ

ていどう御初あぎる」と心の底から唄いたい。

ちゅらさん島の小浜節

2002年（平成14）5月31日付

一、ダンジュティユマリル クママティルシ
マヤ ウフダキバクサティ シルハマ
マイナシ

二、ウフダキヌブティ ウシトゥミユミリ
バ イニアワヌナウリ ミルクユガフ

三、イニアワヌイルヤ ハタチグルミヤラビ
チヂジュラサアティドゥ ウハチアギル

これは今でも小浜島で唄われている「小浜節」である。広く一般に唄われている「小浜節」の一番の出だしが「クモマティルシマヤ カフヌシマヤリバ」。二番の「ウシトゥミユミリバ」が「ウシクダシミリバ」と違います。唄い方も地方と一般の唄い方にも違いがあります。

「小浜節」は宝暦元年（一七五一年）、石垣市大川出身の宮良永祝氏が小浜与人に拝命の折に島の新里加武多氏の唄を聞いて琉歌体に改作曲したと、南島文化研究の祖であられた喜舎場永珣翁の著書『八重山民謡誌』に記されている。元々、島で唄われていたことが推察される。

ちなみに一昔前、沖縄芝居の隆盛期の頃、芝居の悲しい場面でトゥバラーマ、ションカネーとともに「小浜節」も唄われ、地元からひんしゅくを買っていた頃もあった。と言うのも、トゥバラーマやションカネー等との唄の心情が違う。唄の内容は、大岳に登って眺めた四方の風景、裾野に広がる黄金色の稲穂、豊作の喜び、神への感謝を唄ったものである。

しみじみとではなく、おおらかに唄うのが島ならではの唄い方である。本場の「小浜節」を見聞きするには、島に来て聞いたらうなずけるかと思います。が、来られない方々の為に、機会があればご覧戴ければ幸いです。六月二日、石垣市民会館でのちゅらしまチャリティー公演、六月八日自治会館での国指定組踊技能保持者



(笛奏者) 小浜島出身の宇保英明師範の温習の
会でご覧戴ければ幸いです。



島のハーリー

2002 年（平成 14）6 月 14 日付

小浜島はご存知のとおり八重山諸島の真中に位置し、石垣の南西十二キロ、西表の北東二キロの地点にあって大岳（海拔九九・四メートル）を中心に、なだらかな丘陵をなしている周囲十六キロの島である。山あり、田畑ありの農業が主の島で、今日の繁栄をもたらして来た。その中にあって、糸満ハーレーの流れを汲み、小浜島にも五月四日（ユッカヌ日）の海神祭があります。と言うのも島の南西に延びる半島に細崎（くばざき）の集落があります。

その集落は明治の後期ごろから沿岸漁業の適地として、自由入植して創られた集落。糸満から来た方が主で、大正八年ごろから鰹節工場が設置され、同十五年の最盛期には十三の工場が競って繁盛していた。戸数六十戸、人口三百人の繁栄ぶりとの記述があります。

そのころから、細崎の方々が故郷（糸満）を偲び、航海安全と豊漁祈願を込めて行ったことが今日まで続いている。

その細崎のハーリーも継続して開催されて来たかと言うとそうでもなかった。今でこそ戸数二十三戸あり定着しているが、元々のウミンチュは十二戸に過ぎない。が、一つの自治公民館として小さいながらも、集落の伝統の祭とし

て取り組んでいる。

伝統の御神ハーリー、本ハーリー、上がりハーリーと、勇壮に漕ぐ姿は昔も今も変わらない。

転覆ハーリーは、舟と人の都合でおこなわれなくなったが、職域ハーリーや婦人ハーリー、児童の体験ハーリー、生徒と先生の対抗レースと昔になかったハーリーが島の海神祭である。

豊漁、豊穰、航海安全。祈る気持ちは皆一緒である。大漁、豊作をもたらすニライカナイの神に。



長幼の序

2002 年（平成 14）6 月 28 日付

原稿を依頼されて今回が最後の執筆となりました。当初なにを、どう書いてよいのやら戸惑いながらも周りの友人、知人に叱咤激励を受けながら、やっとこさ、ここまでたどり着いた感じです。私自身いろいろと勉強になりましたし、島の一部分でも紹介する機会が得られた事を大変光栄に存じます。これを機会に島のいろいろな出来事を書き記しておく事を痛感するしだいです。

前書きはこれぐらいにして、「長幼の序」の話しよう。辞典を開いて見ると長幼の序とは、年上の者と年下の者との間で守るべき秩序。年齢による規律、とあります。この習慣が今でも脈々と根づき、日頃の生活の中でなにげなく行っている。世界広しといえどもこの事を現在でも実践している所はちゅらさんの島・小浜島だけではないでしょうか。

祭りや祝い座、法事、身内の集まり、ありとあらゆる集会等、その場での長老が上座に座り、そして年齢順と続くのである。同年齢の場合は生まれ月の順となる。その習慣が自然に行われているのでとりわけ案内人はいないのである。

案内を要する方は第三者に対してだけである。その習慣が自然と年寄りや先輩に対する敬愛する心、いたわりの心を培っているのである。

そのような環境の中、高齢化社会とはいえ、島の年寄りは皆、笑顔で元気があります。それが証拠に今でも昔習った唄や踊りなどをよく覚えておられます。先月、八十歳以上のおばー、おじーの三月遊びの余興を手伝いましたが、あの笑顔、美声そして記憶力はさすがだと感銘した。旅にいる子や孫達にあの姿を見てもらいたかった。このような事も「長幼の序」が息づく島ならではのようです。

「公民館に関する書類綴 小浜公民館 平成二年度」 について

竹富町史編集委員会 委員 花 城 正 美

『創立三十周年記念誌』（小浜公民館、1988 年）の編集に際して、公民館の活動記録の収集に苦労したようである。「編集後記」には、「のぞみたいことは三十年間の記録が整理されなくて困った。以後当館運営面で詳細な記録を願うものです」と記されている。

第 46 回竹富町史編集委員会においても、公民館資料の重要性と同時に、保存・継承・活用の方法について議論された。このことに触発され、まずは手元にある資料の整理から始めることにした。本稿は、平成 2 年度公民館長・花城英行氏が収集して一綴りにしたものを、1「公民館総会資料」、2「公文書控え」、3「新聞スクラップ」、4「その他」に分類して作表したものである。ちなみに、この原本は筆者、コピーは筆者と町史編集係で保管している。

ここでは、平成 2 年度の小浜島の状況把握に寄与するための資料として紹介することにする。本資料の時代背景として、『竹富町史 第三巻 小浜島』に収録された「第 14 章 歴史年表」から、「1990 年」（平成 2 年）の事項を確認しておきたい。年表には次の 3 項目が挙げられている。

- ・ 県立八重山病院附属小浜診療所が 6 年ぶりに医師常駐で再開、開所式を挙行。
- ・ 台風 15 号襲来、農作物の被害甚大。
- ・ 新会社の八重山観光フェリー株式会社が発足。

本稿では、原本に綴られた順に、便宜的に一枚一枚通し番号を振りって「文書No.」とした。原則的に 1、2、3 は日付順に並べ直し改めて通し番号を付したが、検索の便宜を図り、表中に「文書No.」の欄を設けた。今後は、4「その他」の資料と連動させるだけでなく、さまざまな資料を突き合わせるための基礎資料としての活用が望まれる。

1 公民館総会資料

次に掲げるのは、平成 2 年 3 月に開催された公民館総会資料の一覧表である。

通しNo.	資 料 名	文書No.
1	平成 2 年度新役員 4/1 ～	2
2	平成元年度補正予算書 小浜公民館	3

3	平成元年度 決算書 小浜公民館	4
4	監査報告書(平成2年3月31日付)、正予算書 小浜公民館	5
5	平成2年度 予算書(案) 小浜公民館	6
6	監査報告書(平成2年3月31日付)	7

2 公文書控え

通しNo	月日	案 件	差 出	受 取	文書No	備 考
1	4/9	国営西表東部地区土地改良事業、事業計画検討会議について〈西国土協力第1号〉	西表東部地区国営土地改良事業推進協議会会長・友利哲雄	小浜公民館長・花城英行	37	
2	4/10	第2回竹富町学力向上対策委員会開催について(通知)〈竹教委第54号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	竹富町学力向上対策委員・各竹富町立学校長	38	
3	4/11	小浜港湾の整備について(要請)	小浜公民館長・花城英行	八重山土木事務所長・高安行雄	10	
4	4/11	小浜航路の水路浚渫について(要請)	小浜公民館長・花城英行	石垣港工事事務所長・西田仁志	11	
5	4/12	西表・小浜間架橋早期実現について(要請)	小浜公民館長・花城英行	竹富町長・友利哲雄	35、36	
6	4/17	文化財保護審議委員会の会議開催について〈竹教委第110号〉	文化財保護審議委員会会長・那根弘	花城英行	60、61	
7	4/17	竹富町役場移転審議委員会町民説明会の開催について〈竹企第100号〉	竹富町役場移転審議委員会委員長・親盛長明	委員・花城英行	62	
8	4/20	防風林事業について	竹富町小浜公民館長・花城英行	—	42	
9	4/25	平成2年度「赤十字社員増強運動」に対する協力依頼について〈竹分区第1号〉	日本赤十字社沖縄県支部竹富町区分長・友利哲雄	各公民館長	71、73	
10	5/13	平成2年度運営委員会(総会)開催について〈竹公連第6号〉	竹富町公民館連合協議会会長・加勢本全喜	小浜公民館長・花城英行	72	
11	5/13	陳情要請事項について	小浜公民館長・花城英行	沖縄開発庁政務次官・宮里松正	64	

通しNo.	月日	案 件	差 出	受 取	文書No.	備 考
12	5/13	西表・小浜間架橋早期実現について(要請)	小浜公民館長・花城英行	沖縄開発庁政務次官・宮里松正	65	
13	5/13	小浜航路の水路浚渫について(要請)	小浜公民館長・花城英行	沖縄開発庁政務次官・宮里松正	66	
14	5/13	小浜港湾の整備について(要請)	小浜公民館長・花城英行	沖縄開発庁政務次官・宮里松正	67	
15	5/15	竹富町役場移転審議委員会町民説明会の開催について〈竹企第101号〉	竹富町役場移転審議委員会委員長・親盛長明	委員・花城英行	75	
16	5/15	竹富町体育協会の総会開催について(通知)〈竹体協第1号〉	竹富町体育協会会長・友利哲雄	代議委員・花城英行	79	
17	5/16	平成二年度総会開催について(通知)	市町村職員年金者連盟八重山支部支部長・上江田吉二郎	会員	76	
18	5/18	平成2年度通常総会の開催について〈西国美第1号〉	西表国立公園を美しくする会会長・友利哲雄	小浜公民館長・花城英行	78	
19	5/26	国営西表東部地区国営土地改良事業の早期実現について(草稿)	小浜公民館長・花城英行	西表東部地区国営土地改良事業推進協議会長・友利哲雄	77	
20	6/4	古謡保存モデル地区の指定について〈竹教委第330号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	小浜公民館長・花城英行	87	
21	6/5	竹富町総合計画審議会開催及び審議委員受諾について	竹富町長職務代理者竹富町助役・小浜正昌	竹富町公民館連絡協議会会長・花城英行	85	
22	6/5	小浜地区学力向上推進委員会の開催について〈竹教委第225号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	小浜地区学力向上対策委員	89、90	
23	6/12	竹富町総合計画審議会の開催について	竹富町総合計画審議会会長・上間毅	竹富町総合計画審議委員	88	
24	6/12	平成2年度竹富町交通安全推進協議会総会開催について	竹富町交通安全推進協議会会長・友利哲雄	竹富町交通安全推進委員	91	
25	6/12	みんなですすめる交通安全 平成2年度 全国交通安全キャラバン隊 第10回沖縄県内キャラバン実施について(ご協力願い)	竹富町交通安全母の会会長・保多盛トヨ	小浜公民館長・花城英行	132	

通しNo.	月日	案 件	差 出	受 取	文書No.	備 考
26	6/15	八重山郡民総合体育大会バレーボール競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	93	
27	6/15	八重山郡民総合体育大会軟式庭球競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	94	
28	6/15	八重山郡民総合体育大会自転車競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	95	
29	6/15	八重山郡民総合体育大会軟式野球競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	96	
30	6/15	八重山郡民総合体育大会バドミントン競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	97	
31	6/15	八重山郡民総合体育大会ソフトボール競技参加申込書	小浜公民館長・花城英行	八重山郡民総合体育大会会長・大山正夫	98	
32	6/18	八重山地区グスク分布調査への協力について(依頼)〈教文第314号〉	沖縄県教育委員会教育長・高良清敏	小浜公民館長・花城英行	92	
33	6/26	平成三年度事業予算要求について	引揚者在外財産問題議員連盟会長・長谷川俊	—	116	
34	6/27	平成三年度事業予算要求について〈全引連発第十一号〉	社団法人引揚者団体全国連合理事長・斎藤邦吉	—	115	
35	7/5	(PTA 指導者研修会の挨拶依頼)〈竹P連発号〉	竹富町 PTA 連合会会長・西大舩高旬	小浜公民館長・花城英行	103	
36	7/10	文化財指定申請について	小浜公民館長・花城英行	竹富町教育委員会教育長・登野原武	99、100、101、102	「ダートウダー」「稲まぢん節」「石造マイマーキィ」
37	7/13	平成3年度事業予算要求について	沖縄外地引揚者協会竹富町支部支部長・大谷用次	各理事	114	
38	7/23	第1回沖縄県公民館長等研修会の開催について(通知)〈教社第591号〉	沖縄県教育委員会教育長・高良清敏	各市町村教育委員会教育長	118	
39	7/26	理事会の開催について(通知)〈竹体協4号〉	竹富町体育協会会長・友利哲雄	副会長・花城英行	117	

通しNo.	月日	案 件	差 出	受 取	文書No.	備 考
40	7/30	公民館施設利用許可申請について〈竹選管第151号〉	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	109	
41	7/30	施設利用許可申請	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	110	
42	8/2	90 県民フォーラムへの参加について〈事務連絡〉	竹富町企画課	竹富町総合計画審議員・花城英行	111	
43	8/7	視聴覚利用等研究開発推進委員会の会議開催について（通知）〈竹教委第644号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	各視聴覚利用研究開発推進委員	123	
44	8/15	竹富町体育協会代議員会議の開催について（通知）〈竹体協第5号〉	竹富町体育協会会長・友利哲雄	体協代議員・花城英行	128	
45	8/22	施設使用許可申請書	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	125	
46	8/22	公民館施設使用許可申請について〈竹選管第164号〉	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	129	
47	8/22	投票管理者の職務代理者選任について（通知）〈竹選管第166号〉	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	130	
48	8/23	協賛依頼書	日本棋院石垣支部支部長・上地高永	竹富町公民館連絡協議会会長・花城英行	126	
49	8/27	竹富町心豊かなふるさとづくり推進協議会の評議員会及び総会の開催について（通知）〈竹心豊第9号〉	竹富町心豊かなふるさとづくり推進協議会会長・友利哲雄	評議員（竹公連会長）・花城英行	131	
50	8/-	お礼	日本赤十字社沖縄県支部支部長・西銘順治、事務局長・成底哲	小浜区長	154	
51	9/4	生涯教育データバンク（施設費）の資料収集に関する調査について（依頼）〈竹教委第729号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	各公民館長	155	
52	9/20	第3回竹富町史編集委員会の開催について（通知）〈竹史第1号〉	竹富町史編集委員会委員長・當山哲男	竹富町史編集委員・花城英行	140	
53	9/21	「飲料水貯水タンク衛生対策強化週間」ポスター提示式について（依頼）〈竹水第118号〉	竹富町長・友利哲雄	各公民館長	141	

通しNo.	月日	案 件	差 出	受 取	文書No.	備 考
54	9/28	結願祭について、父母、地域の皆様方をお願い	竹富町立小浜小中学校 校長・波照間英太郎	各位	139	
55	9/28	赤い羽根共同募金運動実施について(お願い)〈竹分会第133号〉	竹富町共同募金会竹富町分会分会長・友利哲雄	公民館長、民生委員、各区長、婦人会長	152	
56	10/4	「体育の日」におけるスポーツ行事の実施状況について(照会)〈教保第992号〉	沖縄県教育委員会教育長・高良清敏	各市町村教育委員会教育長殿	150	
57	10/8	第7回竹富町親睦スポーツ大会・船舶発着時刻表の送付について〈竹体協第15号〉	竹体協長・友利哲雄	公民館長	148	
58	10/12	公民館施設使用許可申請について〈竹選管第223号〉	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	146	
59	10/12	施設使用許可申請書	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	小浜公民館長・花城英行	147	
60	10/15	「体育の日」におけるスポーツ行事の実施状況について(依頼)〈竹教委第857号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	竹富町各公民館長	151	
61	10/22	第3回竹富町古謡発表会の受け入れ方について(依頼)〈竹教委第823号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	小浜公民館長・花城英行	157	
62	10/29	投票管理者の職務代理者選任について(通知)〈竹選管第247号〉	竹富町選挙管理委員会委員長・大谷用次	花城英行	159	
63	10/30	第二回スラムニ大会審査員委嘱願い	小浜小中学校PTA会長・竹富博彬	小浜公民館長・花城英行	158	
64	11/1	文化財保護審議委員会の会議開催について(通知)〈竹教委第959号〉	竹富町文化財保護審議委員会会長・那根弘	文化財保護審議委員	160	
65	11/9	生涯教育データバンク(施設編)の資料収集に関する調査書提出について(催促)〈竹教委第729号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	各公民館長	161	
66	11/14	御案内	竹富公民館長・前本隆一	花城英行	164	竹富島種子取祭の案内
67	11/19	(会議通知)	八重山毎日新聞社長・黒島清	小浜公民館館長・花城英行	163	

通しNo.	月日	案 件	差 出	受 取	文書No.	備 考
68	11/21	文化財保護審議委員会の会議開催について(通知)〈竹教委第1041号〉	竹富町文化財保護審議委員会会長・那根弘	文化財保護審議委員	165	
69	11/26	上原部落内遺跡(多柄御嶽・ムトゥ御嶽)調査についての意見書	竹富町文化財保護審議委員会会長・那根弘	竹富町教育委員会教育長・登野原武	188	
70	12/5	平成2年度第4回(通算109回)歯科巡回診療実施実績報告書の送付について〈環医第1292号〉	沖縄県環境保健部長・前村善徳	小浜公民館・花城英行	177	
71	12/10	秋の全国交通安全運動の実施について〈竹福第826号〉	竹富町長・友利哲雄	竹富町交通安全推進委員	187	
72	12/14	第38回沖縄県社会教育研究大会の開催について(通知)〈教社第1183号〉	沖縄県教育委員会教育長・高良清敏	各教育事務所長、各市町村教育委員会教育長、各社会教育施設長、各社会教育関係団体長	191	
73	12/18	小浜部落内町道8号線の舗装方について	小浜公民館・花城英行	竹富町長・友利哲雄	198	
74	12/27	第38回沖縄県社会教育研究大会の開催について(通知)〈竹教委第1145号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	竹公連会長、竹婦連会長、竹青協会長、竹PTA会長、竹老連会長	190	
75	12/28	町政懇談会の開催について(通知)	竹富町長・友利哲雄	小浜区長(公民館長)・花城英行	205	
76	1/12	第4回竹富町史編集委員会の開催について(通知)〈竹史第1号〉	竹富町史編集委員会委員長・當山哲男	竹富町史編集委員・花城英行	207	
77	1/12	竹富町史編集委員の再就任方お願い及び委嘱状交付(第4回編集委員会)の開催について〈竹史第2号〉	竹富町長・友利哲雄	竹富町史編集委員・花城英行	189、206	
78	2/8	平成2年度古謡保存モデル地区(活動)報告並びにモデル事業補助金の交付申請について〈竹教委第1296号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	小浜公民館館長・花城英行	208	
79	2/14	小浜栈橋園地管理委託契約について〈竹経第131号〉	竹富町長・友利哲雄	小浜公民館館長	217	→文書No. 218

通しNo	月日	案 件	差 出	受 取	文書No	備 考
80	2/18	平成2年度地区公民館活動実績報告及び請求書提出について(通知)〈竹教委第1337号〉	竹富町教育委員会教育長・登野原武	各地区公民館長	215	
81	3/4	防災避難用機器の配付について〈竹消第41号〉	竹富町災害警戒本部長 竹富町長・友利哲雄	各公民館長	219	
82	3/8	ふるさと創生事業助成金決定通知書	竹富町長・友利哲雄	小浜公民館・花城英行	211	

3 新聞スクラップ見出し一覧

発行日	新 聞 名	見 出 し	文書No
2/28	八重山毎日新聞	竹富町総合計画 基本構想中間報告 / 三大ビジョンを示す	8
4/12	八重山毎日新聞	小浜港湾の早期整備を / 公民館と友利町長 工事事務所に要請	44
4/12	八重山日報	小浜航路しゅんせつを 公民館が要請行動	44
4/20	八重山日報	防風林の整備、充実を / 小浜で住民総決起大会 / 決議文採択、要請行動へ	46
4/21	八重山毎日新聞	これでは通れない！ / 離島航路 特に浅い小浜航路 / 大干潮水深はヒザ丈 / しゅんせつ要請 国、県へ 30 回以上	9、45
4/21	八重山毎日新聞	小浜 医師常駐に大きな期待 / 「受け入れ工事」急ピッチ	47
5/2	八重山日報	小浜診療所 6 年ぶり再開 / 医師待望、開所式で祝う / 医師、看護婦が常駐	56
5/2	八重山毎日新聞	島挙げ診療所再開祝う / 6 年ぶりの医師常駐 / 小浜 島の悲願 やっと達成	55
5/2	沖縄タイムス	小浜島 島あげて再開祝う / 診療所に 6 年ぶりの医師	53
5/4	沖縄タイムス	大弦小弦	57
5/5	沖縄タイムス	南風ぬ島 61 / 小浜島 獅子舞 / 診療所の再開祝う	54
5/5	沖縄タイムス	出船入船 小浜島に貢献する	59
5/7	八重山毎日新聞	ばいかじ ばいかじ 明るく元気な ネアカ看護婦 / 小浜の地紙早苗さん	59
5/10	八重山毎日新聞	小浜「架橋」前提の賛成も / 町役場移転計画説明会 各種意見相次ぐ	63
5/17	八重山毎日新聞	竹公連が総会 会長に花城英行氏 / 10 月に町民スポーツ大会	74
6/3	沖縄タイムス	最前線記者レポート 再開した小浜診療所 / 6 年ぶり 喜ぶ住民 / 急患対策やっとメドつく	82
6/9	沖縄タイムス	小浜郷友会 古里の遊びで運動会 / 昔懐かし縄ない競争	82

発行日	新 聞 名	見 出 し	文書No.
6/9	沖縄タイムス	チャレンジ 21 「90 年代の展望」 69 第 7 部社会福祉・医療 / 離島医療 無医師診療所が 10 カ所 / へき地に大きな格差	84
不明	八重山毎日新聞	記者席 朝から祭り気分	58

4 その他

通しNo.	文書No.	資 料 名	備 考
1	12-34		資料名不明。芳名録か。
2	39	第 2 回 竹富町学力向上対策委員会日程	
3	40	◎キビ作防風林対策事業早期実現小浜地区住民総決起大会を開催することの同意承認を求める	草稿
4	41、 43、 68	決議文	「キビ作防風林対策事業早期実現小浜地区住民総決起大会」の決議文
5	48	小浜診療所開所式・祝宴等について	
6	50	小浜診療所開設セレモニー（案）	
7	51	小浜診療所の推移	
8	52		聯。草稿。祝賀会飾り図案。「医師常駐祝賀会」のものと思われる。
9	69		本村住宅地図。
10	70		細崎地区自由宅地図。
11	80、 81		挨拶文草稿。「医師常駐祝賀会」の挨拶と思われる。
12	86	公民館運営審議委員	
13	104- 108	平成 2 年度 竹富町 PTA 指導者研修	竹富町 PTA 連合会配布資料
14	112、 113	90 県民フォーラム 21 世紀の沖縄振興開発を考える―第 3 次振計の策定に向けて― 開催の要旨	
15	119- 122	平成 2 年度沖縄県公民館等研修会開催要項	
16	124	平成 2 年度視聴覚利用等研究開発推進委員名簿	
17	127	第一回 八重山日報杯 八重山郡字別囲碁対抗試合	
18	133、 134、 135、 136	みんなですすめる交通安全キャラバン隊 第 10 回 沖縄県内キャラバン実施要項	
19	137		結願祭挨拶文草稿

通しNo.	文書No.	資 料 名	備 考
20	138	平成２年度 結願祭参加実施計画 竹富町立小浜小中学校	
21	142	平成２年度公民館運動会 9/24	開会式、閉会式の次第
22	143	第４回小浜公民館大運動会プログラム	
23	144	運動会の歌	
24	145	石垣在小浜郷友会運動会プログラム	
25	149	船舶発着時刻表	
26	153	平成２年度赤い羽根共同募金運動実施計画	
27	156	生涯学習データバンク（施設編）調査用紙	
28	162	生涯学習データバンク調査	
29	166-169		各地区文化財一覧表。166(黒島)、167・168(波照間)、169(西表祖納)
30	170	中野公民館文化財	要請。
31	171-176	竹富町文化財の指定・認定又は選択基準	
32	178-186	平成２年度第４回（通算１０９回）歯科巡回診療実施実績報告書・平成２年度 第３８回沖縄県社会教育研究大会開催要項	
33	192-197		文書No.191の添付資料。
34	199、200		芳名録か。
	201、202、203	H3 1/8 町政懇談会	平成３年１月８日開催の町政懇談会のメモか。
36	204	平成２年 公民館 10大ニュース	草稿。
37	209	事業（活動）実施報告書	文書No.208(公文書控え)の添付資料。提出用か(記入済)。
38	210	事業（活動）実施報告書	文書No.208(公文書控え)の添付資料。原本(記入なし)。
39	212	事業（活動）実施報告書	文書No.211(公文書控え)の添付資料。
40	213	感謝状 前泊竹宏殿	草稿。
41	214	総会次第	草稿
42	216	平成２年度地区公民館活動報告書	記入済。
43	218	自然公園施設管理委託契約書	文書No.211(公文書控え)の添付資料。

『琉球諸島採訪記 ― 崎原恒新ノート』 にみる小浜島関連記事

28 小浜島雑記録

期日 2006 年 3 月 14 日 (火)

○バスのダイヤ (小浜公民館前の掲示)

8 時 15 分	12 時 35 分	16 時 35 分
9 時 25 分	14 時 15 分	
10 時 45 分	15 時 15 分	
コハマ交通		

* コハマ交通はマイクロバスである。

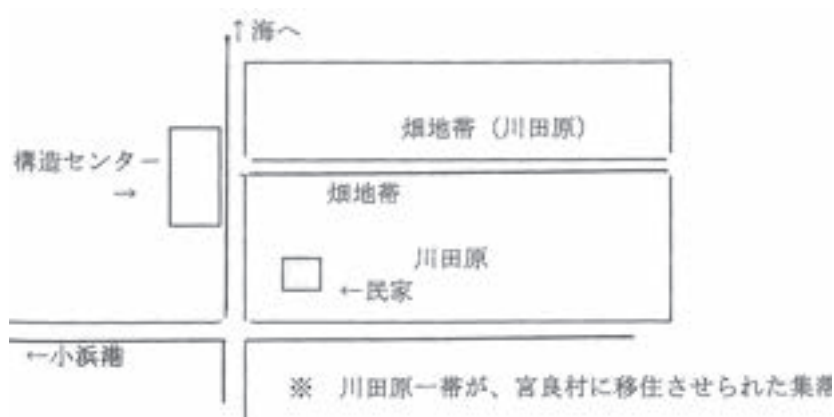
コースは村内 → ヤマハ → 港のコースである。

上記の表は港への乗車時間である。

バス料金は小浜港 ～ 村内 150 円均一料金。

○小浜の給油所 (竹富島同様一カ所のみ) 給油している人に聞くと、給油所隣のお店の人が見ている (管理) ので日曜日と正月の 3 日間以外は毎日開いている (店の閉まる時間までは)。

○人頭税の道切りの位置図



* この地図は構造改善センターの向かいの老人の話で描いたものである。この老人によると現在、小浜村の北の人達はこの構造センターを集会所として使い、南の人達は小浜公民館を集会所として使っている。

○小浜の民俗資料館の話 上江洲均氏の話。県博に勤務していた時、今から 20 年も前の事であるが、慶田盛氏が、小浜で民俗資料館を作るから相談に乗ってくれという。当時、私は県立博物館の副

館長であったので資料を整えて準備していたら、博物館にやってきて、一人でしゃべりまくって、最後に、ありがとうございましたと言って帰って言った。私が話しをする番はなにもなかった…。

○上原さん（県・文化課）の話 伊平屋に行った時、あるお家のお祝いの座に招かれた。挨拶に立った島人の弁。「伊平屋では教育長の次は村の村長と決まっている。次は島の支配者として頑張りたい」と言っていたのには吃驚したと。村長は島の支配者なのである。

○インドアイ 小浜島で初めてインドアイを見た。畑に2本のみ植えられていた。撮影。種子も入手。側にいた上江洲均先生曰く、以前、県博の庭にも植えたことがあったとのこと。

52 小浜島の慶田盛ヒデ（英子）の話

期日 2006年3月14日（火）

場所 小浜島のヒデさん宅。13時～

生年月日 昭和6年生

○司 私は、現在、司をしているが代役である。

○インドアイ インドアイがいつ、どういう経緯で小浜に入ってきたかという話は全く伝わっていない。

○繊維植物 現在、小浜島はチョマの栽培が、芭蕉よりも多く栽培されていると思う。生産量もチョマが多い。

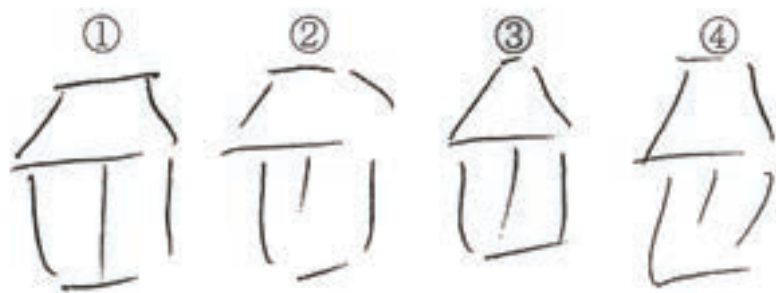
私も、芭蕉を畑の畦に植えた。多く、増えたので一部伐採した。

○布 小浜のスディナは黒である。

○機織り 小浜では、サトウキビの収穫した後に、機織りが始まる。高機は全家庭持っている。しかし、実際に機織りをしているのは約半分くらいである。

○染料 私は、今回、インドアイとクールで染めている。芭蕉のタテ（縦糸？、恒新）はアラミーを使っている。

○衣（下げてあるもの） 私の祖母が司であった。その司が織ったのが左から三番目のタナスである。



①は芭蕉衣 ②はスディナ ③はタナス（これは、麻でクール染め） ④は麻である。（撮影）

○スディナー スディナーは木綿のみで作り、花織が入っている。45・45（ママ）の花織である。

○インドアイ インドアイは夏は刈り取って20～22時間かかる。冬は1晩かかる。アイの収穫はどの時間帯が良いということはない。それで、自分の時間帯を考えて刈る（注・此处では、発酵の義か？、恒新）。

○インドアイ インドアイは600～800回汲んで落としてバイカン（空気焙燥）している。インドアイと琉球藍では色合いが違う。琉球藍は少し、黒みがかかっている。宮古のタデアイの色は今、一

つである。インドアイが良い色である。

- ブルー** ブーの種類は知らない。石垣でも、此処でも、ただ、ブルーと言っている。宮古ではブルーは種類分けしているようだが。（注・ブルーの品種分類の事・恒新）ブルーは春ブルーと秋ブルーが良い。ブルーは刈りとると次々と（芽が）出て来る。40日目くらいのブルーが良い。
- 布** 今回の布は、数人が持ち寄った糸（ブルー）なので、細かさも違うのでお湯で20分位の3回繰り返して一つの糸にまとめた。縦糸はメンで、沖縄本島の南風原から取り寄せた。横糸はブルーである。
- イビと白衣**（御嶽の）イビには白衣でしか着けて入れない。
- タナス** ヒルギで染めて後、タナスを作った。縦糸はメンで横糸はブルーである。
- 機織工場** 小浜にある、機織り工場は（現在）管理委託されていて、利用料がとられるのであまり利用されていない。
- インドアイ** 私は、インドアイを現在、10畳くらい栽培している。従来、インドアイは5軒位、栽培していたが今度来た校長が、ポット苗で配って、今年は10軒位は植えている。しかし、インドアイは直根なのでポット苗ではうまく行かない。
インドアイは3～4月に種を蒔く。冬は成長しない。多年生である。20坪位で一反分はある。インドアイは葉も、葉のついている茎も使用出来る。
- ブルー** ブーはシマ（小浜島）では、紡ぐ人が6～8名位はいる。
- 布** 今回のものは7反分を私一人で染めている。横糸はブルーの予定である。一人で染めるわけは布の色の統一のためである。
- 高機**（小浜資料館の）高機のうち、1台だけは私の息子が作ったが、残りは、南風原の大城さんの処から買ったものである。
- 富崎観音堂** 富崎観音堂は、小浜島のダイクさんの祖先が作った。そのおかげで、「大工」という姓を賜わったと言う。
- インドアイ** インドアイで染める時は、その様子を見ながら、5回、6回と染める。
インドアイは葉も、葉のついている茎の部分も染料として使う。
インド人が来ていたが、その人が言うには、花がピンクに咲いた頃が1番収穫時期として良いと言っていた。
インドアイは年に3～4回収穫する。冬は成長しない。肥料は入れない。
- スディナカカン** 宮城文先生がいつも言っていたが、スディナカカンの白色は1センチ以上長くしてはならない。肌着であるはずのものが長く出ている。見苦しいと言っていた。
- 衣装・機織り** 今は、公民館のものなどは寸法を決めて織らせた為に（着ける人と）、人とあわなくなつて…。
350～380グラムで一反織る（糸）。
衣の模様は、何故、この模様かというのはない。着ける人の好みの模様で織っている。
八重山上布でブルーで織っている。
喜如嘉（大宜味村）はハタムスビしているが、簡単で、便利なために、八重山でも真似る人が出ている。
糸は、舐めて紡ぐので匂いが強く出る。

木灰でやっていた。木綿が消えた。

○**木灰** 木灰はガジュマルの青木を使う。枯れたものではダメ。昔は、灰そのまま入れた。今はうわずみを使っている（インドアイの甕に入れている）。

○**藍容器** 「藍壺」は本甕（注・此处では、焼き物の甕の義、恒新）だったが、甕は重いので今は、ポリ容器を使っている。蜂蜜やお酒も少し加える。

* 藍を入れたポリ容器（藍壺）の上に、サンをおいてある。聞くと、ここ、小浜でもサンと言っているとのこと（恒新）。

53 小浜島の松原さんの農業の話

生年月日 大正 13 年

期日 2008 年 10 月 26 日

○**台中 46 号** 台中 46 号はモチ米である。この 46 号は穂が葉よりも上に出て見事である。

○**稲の種類** 稲にはクルヒジャー・アカヒジャーという米もあった。

在来米は固かった。粳摺りきで粳を落とし、キネで突いて脱穀するがそれでも、割れにはならなかった。

○**千歯** 千歯はあった。それで、脱穀した。

○**砂糖黍** 小浜の現在の砂糖黍は農林 13 号である。戦前は大茎種（注・P O J2725 号のことか、恒新）で、これの前がジャワ種で、さらにその前が読谷山（種）であった。

○**製糖** 砂糖車は牛で廻した。

砂糖は一丁 120 斤の重さだった。

○**芯虫** 大茎種の頃には、芯虫がいた。小学生の頃、芯虫取りの日があった。

○**サトウキビ虫** NC O の砂糖黍になって初めて、サトウキビ虫が発生した。カンシャコバネナガカメムシと言って。

○**稲** 稲は、30 束でヒトマルキという。100 マルキでマジンが一つできた。戦後もマジンもあった。蓬来（米）が出て、実が落ちるようになってマジン（注・八重山方言のシラの事、恒新）が消えた。

○**物忌みの目的** そんし（ママ・？、恒新）の人が海辺の処にあつまった。そうして、野鳥が田畑に移動するように仕向けた。村人も田畑に行かない。そうすると森の（注・防潮林一帯の野鳥のことか、恒新）鳥が、田畑に移動して害虫を食べて退治してくれる。

○**砂糖** 砂糖が専売制で、余り物でも見つかり、大変、重い罰金が科せられた。

54 小浜の慶田城久先生宅にて

期日 2008 年 10 月 26(夜)

キツガンで後の先生の友人達の集い

○**席の順** 小浜では、男も女も村行事でも、家庭のお祝いでも、村人が来るときも全て年齢順に今も座る。最近の若者で、たまにそれを忘れる者がいるが…。（慶田城久）

キツガンの時、70 歳以上は長老席、舞台前の芸能では、長老達の後ろから、皆、カメラを構えるので長老は、皆、後ろの頭しか写らない（久・黒島精耕）。

○**定期船の漁** 竹富航路や小浜航路では、昔は船からガーラやサーラが釣れたが、今は、船足が速く

なって釣れない（同席の久先生の同年生）。

- 小浜航路** 竹富航路や竹富を左に見て小浜島へ石垣港から直行するのが多かった。しかし、深水が浅いので、今は竹富島を右に見て迂回する小浜航路船が多い。その方が、安全で、しかも素人でも航行出来る。竹富島を左に見て小浜に向かうと、満潮か、或いは水路に自信がある人である。私は、今日は竹富島を左に見て来た（黒島先生）。
- 幕（村芝居用の）** 集落センターの大正12年の幕は戦後、日の丸の処を黒く塗ったり、代わりに☆（星の絵）を描いたりしたが、3年前に日の丸の赤に戻した（参加者の村人一同）。
- フンズン** 久先生の床の間の掛け軸の下に香炉あり。先生に聞くと「フンズン」とのこと。
- 子守歌** タネドリのファームル歌は大変、素晴らしい歌である。タネドリの行事の夜中、12時過ぎてから始まる。家々を廻り、道行きでも歌う。夜明けまで歌うが、家々も順序よくではなくて、あっち行き、こっち行きしてまわる。夜明けまで続く。今でもそれはやっている。
- かみ酒** 嚙酒のことをミシュと言うが、私が、子供の頃には作っていた。それは見た。末娘の娘が嚙んで作っていたのをよく覚えている。
嚙む前に、水に浸けてから嚙むのである。あの頃は、歯磨粉は無かったのでヨモギを嚙んで口を綺麗にしたり、あるいは、ホッパー、ホッパーというのはヒハツモドキのことで、その葉を嚙んでからやっていた（小浜島の久先生の同級生）。
- キツガン祭のプログラム** キツガン祭（奉納芸の時）のプログラムというのではない。それに、今も、マイクは一切使わない。昔から、幕あいもなく、次々に出てきて演ずる。

55 小浜島での雑記

期日 2008年10月26日

- バテン** ここにある、高那村のバテンは、これは、小浜の人が高那村に移されたが、廃村になるときに戻って来たものの二点（南村にもある）である。この、北村のもの一つは火事の為に水漏れが残って居る。木綿である。紅型（注・カメラに入れる。恒新）。（小浜公民館にて、公民館役員の方々の弁）
- 布** 喜如嘉のカスリのガラは大柄である。
糸は、舐めてつむ。40～50代の人のものが、特に臭い匂いが出る。蓋を開けると、ムツとした匂いになる。それを嫌って一若い人に一水でやる人がいるが、何故か唾がついていないのは品質が落ちる（那覇市資料室の安里さん談・英子さんそうだよの弁）。
- 弥勒の家（仲盛長儀さん宅にて）** 弥勒の任期は北村四十年である。その間、タネドリ・キツガン・正月に出る（奥さんの弁）。
弥勒の家の直会はメーラクヤヌウサンデーと言う。皿にゆで卵の二分の一に、揚げ豆腐を切ったもの一切れ、それに麦で作った見た目では砂糖天麩羅に似たものが入っている。この料理名は聞いたが、メモ忘れ。

56 小浜島の雑録

（見出しは目次目録の表現に従った）

期日 2008年10月26日

場所 小浜の民俗資料館にて

話者 司と同席の村人の話（慶田盛資料館親戚らしい）の話

- ウームス ウームスは行事用の筵のことである。これは、小浜で織っている。ビーク筵である。キツガンでもこの筵を敷く。小浜では、ビークは少し植えている。
 - サトウキビ 小浜では、現在はNCOはもう栽培されていない。
 - 鬼狂言 鬼狂言は南村の芸能である。
 - 男の一人前 家庭用井戸作り・家庭用墓造り・家の建築して一人前である。
 - パナリ焼き パナリ焼きは島では記憶にない。
 - クンジー クンジーは礼服である。
 - 踊り衣装 踊り衣装はオンナナカスが保管している。
 - 仮面神 弥勒やダードーダーの伝来伝承は全く聞かない。
 - スクミ 今日のスクミについては3時(15時)に合図のドラが鳴ることになっている。
- (以上)

* 藍花、カメラに入れる。

57 小浜島雑記

期日 2008年10月26日

- ブー 平良洋子と娘のスナップ。南の福祿寿の家にて、洋子の弁。石垣はアオブーだけと思う。小浜はブーの種類はない。ブーとしか言われない。アカブーは宮古から石垣に入って来た。
- キツガン 今日の行事は、キツガンと節がセットになったものである(村人の談)。
- 踊り衣装 村の所有者として準備したい(役員の人の弁)。
- キツガン 明日の26日のキツガンは北村が先にあり、その後、南のパレードが続く慣例である(松原さんの話、大正13年4月生)。
- 弥勒 南村の弥勒屋は二カ年に一回づつ代わって行く(北村の弥勒屋の奥さんの談)。
- 公民館長 現在の公民館長は前泊さんである。
- インドアイ インドアイは天気によっても、色に違いが出るという(嵩原智昭さんの弁)。
- キツガン ハイムルブシの従業員もキツガンに参加している。
- カスリ 小浜島で、現在、縦カスリ・横カスリ織るのは今、3人位いる。縦カスリ織るのはたくさんいる(慶田盛英子・談)。

* 村内散策メモ

甘藷・パパヤ・芭蕉・チョマ・クロトン・アカバナー開花中・カンナ開花中・蒲葵・福木・チャーギ・島バナナ・ピパーズ等々あり。

壊れたヒンプンあり、構造が分かるかとカメラに入れる。

- 公用車 竹富町役所の公用車は常に、小浜港に置いて、出張で利用出来るようになっている。しかし、竹富島と波照間島には置いていない(嵩原智昭の談)。
- シマンギン 長老のシマンギン。
- 民宿 10時がチェックアウトである。門限というのではない。
- セミ 今、鳴いているセミは小浜方言ではペントルと言う。これは音にあわす。キツガンの時、

嘉保根嶽でたくさん鳴いていたもの（久先生）。

○ハピラ ハピラという踊りはここでしか踊らない。余所に出すことはしない（村人の弁）。赤い法師の耳の道具をもっているもの。カメラに入れる。

○キツガンの奉納芸 プログラムは作成しない。踊りの「番札（メクリ）」も無論ない。

○関係者 祭の関係者には赤いリボンを付けさせることもある。

*舞台の幕はすけてみえるものである。

*県の調査団としてお金を出し合い、3人で祝儀1万円だす。

*ダンドク 小浜島に、黄色の花のダンドクが多く咲いている。赤いダンドクの花はみかけなかった。

○民宿 平田の民宿もそうであるというが、僕の泊っている民宿も、室内からの内鍵はあるが、外出する時は外からの鍵はどの部屋もない。シマには泥棒はいないからとか。平田太一の家が民宿「うふたき荘」（久先生の隣家）で、僕の泊まった民宿がダパンプの実家で「宮良荘」である。

○山中嶽 連・網で覆う。側に川あり。カメラに入れる。

○船 16時45分の定期船で小浜発、石垣港に向かう。

○田川・後照 嶽、カメラに入れる。イベも撮影。

○仲盛宅にて 南北とも対抗意識がある（村人の談）。

仲盛宅のペーラ、撮影。

そこで、二人の人がカギヤデフの踊りを踊っていた。

仲盛宅は、現在は弥勒の家。4年間である。南村は二カ年間という。

昨日、北は公民館で、南は集落センターでシクミが行われた。

ブンドリヤーというのは、踊りを練習する場の家の事である。

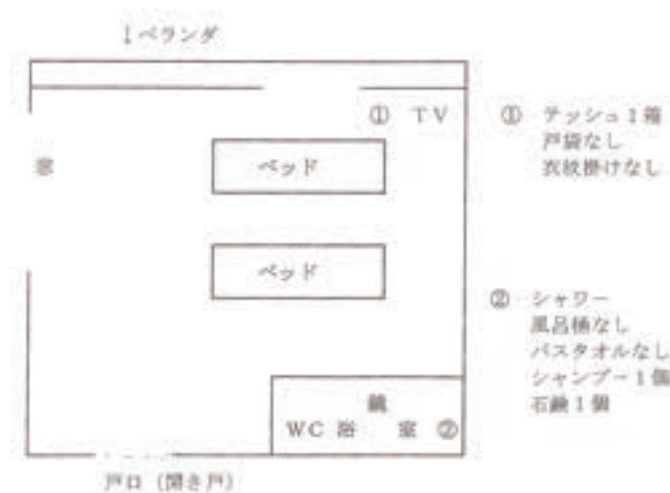
みるせー？。ザーマール、二年で交代。

銅鑼。昨日、夜の19時15分、夜のスクミの合図で、両村とも、それぞれ、銅鑼を打ってまわっていた。各村1人で。

*馬・牛 シマに、点々と数頭の馬が野に繋がれていた。

牛も少しいた。牧場や野原に。

*植物 ウンチェーの花が咲いていた。また、ホテアオイの花も咲いていた。



解 題 『琉球諸島採訪記 ― 崎原恒新ノート』

このほど崎原恒新氏から、沖縄県内を中心とする膨大な民俗調査ノートから、八重山に関するノート 22 冊（各 B 版簡易製本）を御提供いただいた。崎原氏は 1943 年、与那原町板良敷生まれ。著書に『八重山ジャンルごと小事典』（ボーダーインク、1999 年）、『琉球の死後の世界』（むぎ社、2005 年）などの他、論文・調査報告など多数ある。これらの著作の背景となったのが「崎原恒新ノート」である。

崎原恒新氏は教職に就きながら、実地調査を繰り返すなか、「あやふやな 100 字よりも正確な 1 行メモ」（「記録すること論文を書くこと」『琉球諸島採訪記 ― 崎原恒新ノート―』〈第 3 号〉参照）をモットーに、調査のメモや地域の長老、農作業をする人、友人・知人、職場仲間、他からの聞き書きを大切に残してこられた。崎原氏が強調されるように、まさしく「1 行メモも余談も貴重である」（「はじめに」『琉球諸島採訪記 ― 崎原恒新ノート―』〈第 1 号〉参照）。

とりわけ、崎原氏が教師として石垣市に赴任した 1964 年（昭和 39）から 1968 年（同 43）、再び白保中学校の教頭として赴任した 1996 年（平成 8）から 1999 年（同 11）の調査・取材記録には、当時の八重山社会がリアルに映されている。同時に、誠実な崎原氏の人柄もうかがえるものである。また、日記に記された「八重山で日常見聞きした八重山の事、或いは一寸した、言い伝えや民俗等のメモ」（崎原氏談）も興味深く見逃せない。

提供いただいた 22 冊のそれぞれに収録された記録資料の内訳は次の表のとおりである。

号 数	収 録 資 料	備 考
第 1 号	「西表調査ノート (1965 年)」 「八重山採訪記第 2 号」	2008 年発行。66 頁。
第 2 号	「八重山採訪記 第 3 号」 「八重山採訪記 第 4 号」	2009 年発行。63 頁。
第 3 号	「八重山採訪記 第 5 号」	2009 年発行。148 頁。
第 4 号	「資料集」	2009 年発行。95 頁。
第 5 号	「八重山採訪記 第 6 号」 「八重山日誌」	2009 年発行。94 頁。
第 6 号	「八重山日誌 (1966 年 1 月 11 日～1968 年 2 月 23 日)」	2010 年発行。94 頁。石垣中学校時代の日記の抜粋。
第 8 号	「八重山日誌 (三)」 「八重山調査録」 「八重山碑文記」 「岳昌姓系図 (抄)・雑録」	2010 年発行。85 頁。

号 数	収 録 資 料	備 考
第 31 号	「八重山諸島一碑文・立看板・横幕・ポスター……」	2016 年発行。114 頁。 八重山諸島の「八重山諸島一碑文・立看板・横幕・ポスター」などの写真を文字資料として収録。
第 64 号	「沖縄探訪記 1999 年 (1)」 「資料 (北谷町・八重山)」	2019 年発行。121 頁。
第 79 号	「八重山探訪記・2000 年」	2021 年発行。116 頁。
第 82 号	「八重山開拓地ノート・1997 年」 「東京日誌 (1993 年 4 月 6 日～1993 年 5 月 20 日)」	2021 年発行。126 頁。
第 83 号	「八重山戦後開拓地」 「宮古探訪記」	2021 年発行。124 頁。
第 99 号	「街角風景・ポスター・立看板・横幕・掲示板」	2023 年発行。120 頁。 沖縄各地の「街角風景・ポスター・立看板・横幕・掲示板」の写真を文字資料として収録。
第 101 号	「日誌 中頭教育事務所・白保中学校時代 (1996 年 1 月 14 日～1996 年 4 月 25 日)」	2023 年発行。120 頁。
第 104 号	「白保中学校勤務時代日誌Ⅱ (1996 年 4 月 27 日～1996 年 5 月 26 日)」	2024 年発行。120 頁。
第 105 号	「白保中学校勤務時代日誌Ⅲ (1996 年 5 月 26 日～1996 年 9 月 3 日)」	2024 年発行。120 頁。
第 106 号	「白保中学校勤務時代日誌 第 4 号 (1996 年 9 月 4 日～1997 年 1 月 2 日)」	2024 年発行。120 頁。
第 107 号	「石碑・立看板・張り紙・幕等」	2024 年発行。120 頁。 「石碑・立看板・張り紙・幕等」の写真を文字記録として収録。
第 108 号	「白保中学校勤務時代の日誌 (1997 年 1 月 3 日～3 月 23 日)」	2024 年発行。120 頁。
第 109 号	「白保中学校勤務時代日誌 第 6 号 (1997 年 3 月 24 日～1997 年 11 月 6 日)」	2024 年発行。120 頁。
第 110 号	「白保中学校勤務時代日誌 第 7 号 (1997 年 11 月 7 日～1998 年 5 月 28 日)」	2024 年発行。120 頁。
琉球関係甘藷 資料目録		2008 年発行。78 頁。 野国総官 400 年祭に作成したもの。

上の 22 冊は内容の性格上、次の五つに分類できる。

	ノートNo. (号)
(1) 八重山を中心とした聞き取りによる民俗調査	1、2、3、4、5、8、64、79
(2) 八重山開拓地における聞き取り調査	82、83
(3) 八重山赴任当時の日誌	6、101、104、105、106、108、109、110
(4) 広告・ポスター・立看板の文字資料	31、99、107
(5) 琉球関係の甘藷目録	『琉球関係甘藷資料目録』

本稿の目的は、『琉球諸島採訪記—崎原恒新ノート—』〈第 79 号〉に収録された「八重山採訪・2000 年」から、小浜島に関連する記事を抽出し、「小浜島関連記事」として供するためである。

『琉球諸島採訪記—崎原恒新ノート—』〈第 79 号〉には、項目ごとの見出しに通し番号が付され、全部で 57 項目が記録されている。ここでは、そのうちの 28「小浜島雑記」、52「小浜島の慶田盛ヒデ（英子）の話」、53「小浜島の松原さんの話」、54「小浜島の慶田城久先生宅にて」、55「小浜島での雑記」、56「小浜島の雑録」、57「小浜島雑記」の 7 項目を、「小浜島関連記事」とした。

（飯田泰彦）

小浜島に関する資料

- 1906年 ・「八重山離島の新城島小浜島」『琉球新報』1906年12月21日付
1939年 ・河村只雄「小濱島から小浜島へ」「小濱の赤マタ・黒マタ」「小濱の迷信問答」『南方文化の探究』(沖縄文教出版株式会社)→1999年
1940年 ・宮良賢貞「小浜島のニロー神」(『南島』〈第1輯〉台北市 南島発行所)

● 1950 年代

- 1950年 ・東恩納寛惇「小濱島」『南島風土記』(沖縄郷土文化研究会南島文化資料研究室)
1952年 ・宮本演彦「小浜島の穂祭り」(『民間伝承』〈第16巻第4号〉)
1955年 ・「小浜にアカハチの短剣？」『海南時報』1955年4月6日付
・酒井卯作「小浜島の農耕儀礼」(『日本民俗学』〈第2巻4号(通巻8号)〉日本民俗学会)

● 1960 年代

- 1964年 ・「小浜島の電力事業に融資—余剰農産物資金—」『琉球新報』1964年4月7日付
1965年 ・村武精一「八重山・小浜島の聖域(wan)祭祀」『沖縄の社会と宗教』(株式会社平凡社)
1966年 ・小浜島民俗芸能保存会編『うふたき』(小浜島民俗芸能保存会)
1967年 ・喜舎場永珣「小浜節」『八重山民謡誌』(沖縄タイムス社)
・吉野高善『ふる里と共に』(金剛出版)
1968年 ・早稲田大学アジア学会第6次八重山文化社会学調査隊『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』(早稲田大学アジア学会)
・高橋紘一「八重山、小浜島の豊年祭—近代化論を加えて—」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・池内由二郎「共同体と年中行事—特に宗教行事と関連して—」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・立原克彦「小浜島で思い出すもの」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・平川正隆「八重山諸島(小浜)に於ける個人間コミュニケーション及び外社会とのコミュニケーションに関するレポート」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・坪井通子・青木久枝「小浜の社会生活よりみた親族組織」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・伊藤好子「小浜における婚姻形態」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)
・岡本賢次「小浜島に於ける創価学会信仰を持つ家の全体像」(『実地調査報告書—沖縄・小浜島—』)

● 1970 年代

- 1970年 ・喜舎場永珣「マミドゥマユンタ」「サンドゥキジラマ」「南サコダジラマ」「ジラバガヌ松金ユンタ」「日入りヌジラバ」「ウムトゥ嶽アヨウ」「チィドゥリャーマ誦言」「ククル嶽アヨウ」「旅カロイジラバ」「フンカドゥ誦言」「マカルセージラマ」「作方ジラマ」『八重山古謡』〈下巻〉(沖縄タイムス社)
- 1971年 ・琉球大学地理研究会編「小浜島調査報告」『琉大地理』〈第10号〉(琉球大学地理研究会)
・大野力・富山弘基「小浜島の印度藍染」『沖縄の伝統織物』(徳間書店)
・宮良賢貞「小浜島のニロー神」(『沖縄文化論叢』〈第2巻〉)
- 1972年 ・山城浩『小浜島誌』(小浜島郷友)
- 1973年 ・村武ゼミナール「八重山村落社会の祭祀的世界—竹富町小浜島—」(『社会学関係ゼミナール報告 昭和47年度』〈第9集 上巻〉明治大学政経学部)
・黒島惇・花城正美編『小浜島舞踊曲工工四第一巻』(在沖小浜島郷友会)
- 1974年 ・大城志津子「染織・竹富島と小浜島の織物を訪ねて」(『琉球の文化』〈第3号〉琉球文化社)
・仲原清徳「小浜島における朝鮮人の生活」(沖縄県教育委員会編『沖縄県史』〈第10巻各論編9 沖縄戦記録2〉沖縄県教育委員会)
・『郷土』〈第13号〉(沖縄大学沖縄学生文化協会)
- 1975年 ・『昭和49年度 小浜島地下水試掘調査報告書』(沖縄県土木部河川課)
・大兼久道夫「小浜節」(『しまうた』〈創刊号〉しまうた文化研究会)
・村武精一「八重山小浜島の聖地祭祀」「南部琉球における象徴的二元論」『神・共同体・豊穰—沖縄民俗論—』(未来社)→1991年
・小浜島民謡編集委員会編『小浜島民謡集』(小浜島民謡編集委員会)
・高見富美子「小浜島における音楽学習行動」〔修士論文〕(東京藝術大学民族音楽ゼミナール編『東京藝術大学論文集』)
・松原オナリ「トウフタイルのカナイ布」(聞き書き/山里節子「〈聞き書き〉御用布物語—明治大正期の女性労働の一面—」、『八重山文化』〈第3号〉東京・八重山文化研究会)
- 1976年 ・慶田盛正光『「マミドーマ」についての所見』(『沖縄タイムス』1976年3月13日付)
・「南風川田於奈利淑女について」「南風川田於奈利儀板古文書写し」「海垣(町指定)」「南風川田於奈利の衣装及び茶器」「カンドウラ石(町指定)」「コーキ原ガジマル群落(町指定)」「稲嶺筑登之の正装」「大岳(町指定)」「節さだめ石(町指定)」「竹富町の文化財」(竹富町教育委員会)
・篠田良明・木崎甲子郎「八重山群島小浜島の地質」(木崎甲子郎編『琉球列島の地質学研究』〈第1巻〉琉球大学教養部地学教室)
・牧野清「小浜島のビチリ」(『八重山文化論叢』八重山文化研究会、「八重山のビッチル(自然石)信仰」)
- 1977年 ・喜舎場永珣「小浜村のアカマター神祭」『八重山民俗誌』〈上巻〉(沖縄タイムス社)
・「小浜島」(沖縄歴史研究会『沖縄県の歴史散歩』山川出版社)
・「小浜(赤またあ節、小浜節、苧引き、他)」『竹富町の無形文化財』(竹富町教育委員会)

- 1978年 ・具志春雄「地域性豊かな先島の婚姻習俗―八重山白保・小浜、宮古砂川・池間―」(『青い海』
〈第8巻第9号 通巻77号〉青い海出版社)
- ・村山秀雄「小浜島の細崎」(『八重山毎日新聞』「不連続線」欄1978年5月21日)
- ・新川明「小浜島」『新南島風土記』(大和書房)
- ・下嶋哲朗「小浜島」『沖縄・聞き書きの旅』(刊々堂出版社)→1983年
- 1979年 ・宮良賢貞「小浜島の芋引踊とその周辺」『小浜島のミンマーニンブジャー』『八重山芸能と民俗』(根元書房)
- ・ゴールデン・バーバラ「小浜のポールの日記―太鼓をめぐる観察―」(『人類文化』〈創刊号〉筑波大学人類文化研究会)
- ・「最南端のレジャー基地・小浜島」『サンデー毎日』〈58-32〉(毎日新聞出版)

● 1980 年代

- 1980年 ・高原繁『ふるさとの味小浜語彙』(かわち印刷有限会社)
- ・「小浜―豊年祭には大にぎわい―」『郷友会』(琉球新報社)
- 1981年 ・仲原一郎「キビ刈りの「ゆい」など―1978年1月―小浜島を中心に―」『琉球弧の住民運動』
(三一書房)
- ・當間一郎「小浜島の結願祭」(『八重山の民俗芸能(3) 沖縄県民俗芸能悉皆調査 第3集』(沖縄県教育委員会)
- ・黒島精耕「小浜節の原思想を求めて」〈上〉〈中〉〈下〉(『八重山毎日新聞』1981年8月29日-1981年9月1日)
- ・「小浜島の御嶽林植生調査」『沖縄県社寺・御嶽林植生調査』(沖縄県教育委員会)
- ・星勲「小浜島のチクリヤ浜の悲哀」『西表島の民俗』(友古堂書店)
- 1982年 ・加治工真市「琉球、小浜方言の音韻研究序説」(『琉球の言語と文化』仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会)
- ・瀬戸弘「第五、六代町長 崎田永起」「第七代町長 白保生雄」「小浜海綿種苗増殖所」「黒島、小浜、大原保育所開設」「小浜外十三ヶ所の公民館建設」「本土資本の小浜製糖工場を買収」「小浜、土地改良整備事業」「小浜島海底水道」『竹富町の島々と共に一歴代首長と五十年の回想―』(私家本)
- ・真栄城守定「小浜へ」『八重山・島社会の風景』(ひるぎ社)
- ・仲宗根幸市「八重山の名歌―「小浜節」のふるさとを訪ねて―」(『南島研究』〈第23号〉酒井卯作)
- ・西表島土地を守る会・西表地区宿泊業組合「小浜島におけるヤマハ『はいむるぶし』進出の実態レポート」『琉球弧の住民運動』(CTS阻止闘争を広げる会)
- ・東京藝術大学音楽学部民族音楽ゼミナール「第一次調査(昭和49年度)、第二次調査(昭和53年度)報告書」(仮題)(東京藝術大学音楽学部民族音楽ゼミナール)
- ・『ばがースィマクモウ(小浜)』(小浜中学校社会科教材)
- 1983年 ・牧野清「小浜島」「小浜」『沖縄大百科事典』〈中巻〉(沖縄タイムス社)
- ・石垣博孝「小浜御嶽」「小浜島のポール」『沖縄大百科事典』〈中巻〉(沖縄タイムス社)

- ・加治工真市「小浜島の方言」『沖縄大百科事典』〈中巻〉(沖縄タイムス社)
- ・宮城康一「小浜島東海岸のハスノハギリ群落」『沖縄大百科事典』〈中巻〉(沖縄タイムス社)
- ・森田孫榮「小浜節」『沖縄大百科事典』〈中巻〉(沖縄タイムス社)
- ・若井康彦「帰らざる島々―八重山群島―」『島の未来史』(ひるぎ社)
- ・下嶋哲朗「小浜島」『沖縄・聞き書きの旅』[新版](刊行堂出版社)←1978年
- 1984年 ・在沖小浜島郷友会『小浜島出身総合住所録』(在沖小浜島郷友会)
- ・福田晃・真下厚・狩俣恵一・仲盛長秀・花城正美『南島昔話叢書9 八重山諸島 竹富島・小浜島の昔話』(株式会社同朋舎出版)
- ・野本寛一「焼畑地域研究ノート 八重山諸島の焼畑 小浜島」『焼畑民俗文化論』(雄山閣出版)
- 1985年 ・加藤富美子「小浜島の盆行事の芸能の学習―音楽学習の機能―」(『関西楽理研究Ⅱ』関西楽理研究会)
- ・比嘉朝進「島々を望む大岳・小浜島」『親子でたずねる沖縄名所』(沖縄教育出版)
- ・高原繁『郷土文学二 小浜読本 ―随想録望郷 第2集―』(私家本)
- 1986年 ・加藤富美子「小浜島の結願祭―その芸能と学習構造」(『諸民族の音―小泉文夫先生追悼論文集』音楽之友社)
- ・角川日本地名大辞典編纂委員会編「小浜〈竹富町〉」「小浜島〈竹富町〉」『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』(角川書店)
- 1987年 ・石原昌家「小浜島細崎在住糸満系漁民の生活史」(中楯興編著『日本における海洋民の総合研究―糸満系漁民を中心として―』九州大学出版会)
- ・尾竹俊亮「いつも夏に染まる八重山―小浜島の細崎漁業―」『オタケ君の南島ガイド―島めぐり人めぐり―』(海風社)
- ・石垣博孝「八重山諸島―小浜島(拝所・年中祭祀)」(『日本の神々―神社と聖地』〈第13巻〉)(白水社)
- ・『舞と太鼓』〈パンフレット〉(鹿扇会香川キミ舞踊研究所)
- 1988年 ・目崎茂和「小浜島―「タンゲン島」の生いたち―」『南島の地形―沖縄の風景を読む―』(沖縄出版)
- ・慶田盛正光『島に生きる』(私家本)
- ・『小浜公民館創立30周年記念誌』(小浜公民館)
- ・「50 赤マター神事由来」『日本伝説大系』〈第15巻〉(みずうみ書房)
- ・「沖縄県・小浜島の集落立地と風環境について」(『日本建築学会中国支部研究報告書』〈第15号〉日本建築学会)
- ・「日本のマリン・リゾートの草分け はいむるぶし」『VACATION』〈1989年8月号〉(クリエイティヴスタック)
- ・『島のまつり ―島おこし芸能発表会―』〈パンフレット〉(小浜公民館増築資金造成芸能発表実行委員会)

● 1990 年代

- 1990年 ・糸数兼治「小浜島の道」(沖縄県教育庁文化課編『沖縄県歴史の道調査報告書〈Ⅶ〉―八重山諸

島の道一』沖縄県教育委員会)

・牧野清「155 嘉保根御嶽」「156 東むてい御嶽」「157 仲山御嶽」「158 佐久伊御嶽」「159 西山御嶽」「160 照後御嶽」「161 こうき御嶽」「162 川田御嶽」「163 なかんど御嶽」「164 神高御嶽」「165 高那御嶽」「166 嘉弥真御嶽」「小浜島・嘉弥真島御嶽位置略図」「小浜島・嘉弥真島御嶽のお嶽概説」『八重山のお嶽』(あーまん企画)

・黒島精耕「小浜島の「ダートゥーダ」—その民俗歌舞解明の視点—」〈1〉-〈6〉(『八重山毎日新聞』1990年12月5日-1990年12月13日)

・中山盛茂・富村真演・宮城栄昌「六五、東嶽の東司 山城マワツ」「六六、川田嶽の司 与那覇ヲナリ」『のろ調査資料』(ボーダーインク)

・大城直樹「亜熱帯島嶼の集落立地と生活様式—八重山群島・小浜島—」(『人文地理』〈42-3〉人文地理学会)

・酒井敦「テル子おばあと蛸とりおじい」(『創』〈1990年11月号〉創出版)

1991年 ・村武精一「南部琉球における象徴的二元論」→1975.8『環中国海の民俗と文化2 神々の祭祀』(凱風社)

・森田孫栄・波照間永吉「小浜島の結願祭」(『沖縄のまつり』沖縄タイムス社)

1992年 ・「小浜島の結願祭」「小浜節」「崎山くばま」「ダートゥーダ」『琉球芸能事典』(那覇出版社)

・波照間永吉「小浜島の御嶽の神歌」(『沖縄芸術の科学—沖縄県立芸術大学附属研究所紀要—』〈第5号〉沖縄県立芸術大学附属研究所)

・通事孝作「《戦跡をたずねて》水上特攻艇基地」(『竹富町史だより』〈第2号〉竹富町)

・大仲義雄「老いの声をきこう」(大仲浩夫)

1993年 ・波照間永吉「小浜島の結願祭」(『沖縄芸術の科学—沖縄県立芸術大学附属研究所紀要—』〈第6号〉沖縄県立芸術大学附属研究所)

・通事孝作「《聖地めぐり》—東御嶽—」(『竹富町史だより』〈第4号〉竹富町)

・通事孝作「《歴史の証言》—村役場の小浜移転—」(『竹富町史だより』〈第4号〉竹富町)

・通事孝作「《地名あれこれ》—アカツァバナ—」(『竹富町史だより』〈第4号〉竹富町)

・雀宅仁「祭儀集団からみた八重山島嶼社会誌—小浜島の記述と再構成—」(『社会人類学』〈第19巻〉弘文堂)

・入嵩西正治編著「小浜島」『八重山糖業史』(石垣島製糖株式会社)

・平田大一「小浜島 テンプス・オブ・アジア」(まぶい組編『島々清しゃ』ボーダーインク)

・宮里千里「シマジク-シマづくし20連発 世乞い、宮古・西原」『島軸紀行 シマサバはいて 異風南島島唄共同体』(ボーダーインク)

1994年 ・松原浩「表紙の写真:小浜幼稚園」『竹富町史だより』〈第5号〉(竹富町)

・通事孝作「小浜島の唐人墓碑」(『竹富町史だより』〈第5号〉竹富町)

・「小浜島」(沖縄歴史研究会『新版 沖縄県の歴史散歩』)

・平田大一『南島詩人』(富多喜創)

・平田大一「にっばる(根っこ)の詩をうたおう」(『情報 やいま』〈No.26〉南山舎)

・通事孝作「《歴史の証言》—小浜島のカツオ漁業—」(『竹富町史だより』〈第6号〉竹富町)

・宮良郁代「小浜島 赤い花緒の草履」(『情報 やいま』〈No.31〉南山舎)

- ・赤嶺政信「小浜島の家屋落成式と部屋の名づけ」(『沖縄県の民俗芸能 沖縄県文化財調査報告書』〈第112集〉沖縄県教育委員会)
- ・宇垣用康追悼編集委員会編『宇垣用康・追悼集』(私家本)
- ・宮良松千代『御拝領祝賀の栞』
- ・大城學「小浜島の芸能」(『民俗芸能』〈75〉民俗芸能刊行委員会)
- 1995年 ・吉江真理子「シリーズ・手仕事の生まれる風景 島の織物② 小浜島 トヨおばあの藍と暮らす日々」(『情報やいま』〈No.36〉南山舎)
- ・「特集 ヤイマのてんぷす(へそ) 小浜島から」(『情報 やいま』〈No.37〉南山舎)
- ・通事孝作「《新聞で知る町の今昔》—小浜校に愛の贈物—」(『竹富町史だより』〈第8号〉竹富町)
- ・森永用朗「ふる里を撮る 南風川田於那利の墓(小浜島)」(『八重山毎日新聞』1995年11月8日付)
- ・雀仁宅「八重山・小浜島の随想」(『南島研究』〈第36号〉酒井卯作)
- ・雀仁宅「沖縄八重山の祭儀的世界—小浜島の事例を中心に—」(『比較民俗学』〈第12輯〉韓国比較民俗学会)
- ・『竹富町立 小浜小学校 創立百周年記念のしおり』(竹富町立小浜小学校創立百周年記念事業期成会)
- ・『生命華』〈パンフレット〉(鹿扇会香川キミ舞踊研究所)
- 1996年 ・大嵩善立「《戦さ場の実相》護郷隊の思い出」(『竹富町史だより』〈第9号〉竹富町)
- ・田淵桂子「島の今を生きようとする若き吟遊詩人の「てんぷす・オブ・アジア」宣言。」(『〈沖縄・奄美プライベート・ブックレビュー100〉島立まぶい図書館からの眺め』(ボーダーインク))
- ・『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』(竹富町)
- ・大石量勢「防衛隊生活とマラリア罹患」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』竹富町)
- ・仲原正明「御嶽での授業と空襲」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』竹富町)
- ・平田清「厳しい竹槍訓練」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・佐々木信治「第二六震洋引野部隊戦記」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・金城幸子「空襲を避け非難小屋に」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・吉野高量「青空教室で軍国教育」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・大嵩善立「護郷隊の思い出」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・前本良吉「防衛隊に召集されて」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・大盛武夫「戦時中の村役場と米の供出」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・黒島節「恐怖の空襲と家族の死」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・桃原俣子「従軍看護婦として」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・仲盛アサ子「看護教育を受け兵隊とともに」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・山城木「鉄血勤皇隊と空襲」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・入川廣雄「練り上げ徴兵検査で旅団配属」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)

- ・大久英二「那覇と小浜での教員生活」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・大石英量「地獄絵の被爆地・長崎」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・山城安太郎「悲惨な東京大空襲」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・石垣武雄「大分第四七連隊に入営して」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・仲盛鎮夫「憧れの憲兵下士官」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・棚原長治「駆逐艦「初霜」に乗船」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・野底ヨネ「空襲とマラリア恐怖の戦さ」(『竹富町史 第十二巻 資料編 戦争体験記録』)
- ・佐竹潔「南島詩人舞台」(『情報 やいま』〈No.47〉南山舎)
- ・通事孝作「《写真に見るわが町》漁民の村」(『竹富町史だより』〈第10号〉竹富町)
- ・大田静男「小浜島の慰安所一学校の床板をはぎとって作られた慰安所―「アールムティの震洋艇格納壕―奴隷のようにこき使われた朝鮮人軍属―」『八重山の戦争』(南山舎)
- 1997年 ・前本良吉「《歴史の証言》小浜尋常小学校移転と井戸掘り」(『竹富町史だより』〈第11号〉竹富町)
- ・「《聖地めぐり》東御嶽」(『竹富町史だより』〈第11号〉竹富町)
- ・小浜小学校創立百周年記念誌編集委員会編『うふたき』(竹富町立小浜小学校)
- ・岩崎魚介「リゾートと架橋問題」『南の島の便り―やぶれナイチャーの西表島生活誌―』(沖縄出版)
- 1998年 ・加藤富美子「民俗の音楽で育つ人々―沖縄・八重山の一青年の軌跡を通して―」(『東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・健康・スポーツ学』〈50〉東京学芸大学)
- ・「《町史編集委員会トピックス》―小浜島の史跡巡見―」(『竹富町史だより』〈第13号〉竹富町)
- ・「《文化財探訪》ウティスクヤマ遺跡」(『竹富町史だより』〈第14号〉竹富町)
- ・山里純一「八重山の南方系芸能」(石塚正英『世界史の十字路・離島〈社会思想史の窓 第119号〉』社会評論社)
- ・大石安清『寿 古稀 大石安清73年間の歩み』(私家本)
- ・大仲久枝『小さな島の子育て』(大仲浩夫)
- ・『小浜島の民話』(沖縄国際大学遠藤ゼミ調査団遠藤研究室)
- ・琉球新報社編「小浜島」「小浜節」『沖縄コンパクト事典』(琉球新報社)
- 1999年 ・河村只雄『南方文化の探求』(講談社学術文庫)←1939年
- ・森田孫榮「小浜島の念仏踊り」「竹富町小浜島のポーリィの神歌」『八重山芸能文化論』(森田孫榮先生論文集刊行事業委員会)
- ・崎原恒新「小浜島」「細崎村」『八重山ジャンルごと小事典』(ボーダーインク)
- ・M子「小浜島便り16 歌って踊って夏祭り」(『情報やいま』〈No.84〉南山舎)
- ・通事孝作「〈むかし八重山35〉小浜島のパイン栽培」(『情報やいま』〈No.84〉南山舎)
- ・小川護「竹富島・小浜島・黒島の地理的概要」(『八重山、竹富町調査報告書 1』沖縄国際大学南島文化研究所)
- ・来間泰雄「竹富3島(竹富・小浜・黒島)の経済と農業」(『八重山、竹富町調査報告書 1』)
- ・野原三義「八重山竹富町小浜方言の助詞(1)」(『八重山、竹富町調査報告書 1』)
- ・波照間永吉「小浜島の種子取祭の儀礼と歌謡」(『八重山、竹富町調査報告書 1』)

- ・波照間永吉「小浜島の結願祭」『南島祭祀歌謡の研究』(砂子屋書房)
- ・平田太一「第38回『渦の真ん中』」(『情報やいま』〈No.84〉南山舎)
- ・宇保英一『うーやーぬびゃー』(私家本)

● 2000 年代

- 2000年
- ・雀仁宅「八重山島嶼社会の民俗誌 小浜島を中心とした比較」〈東京都立大学博士論文〉
 - ・「『聖地めぐり』佐久伊御嶽」(『竹富町史だより』〈第17号〉竹富町)
 - ・宮良笑『笑の泣き笑い物語』(逢萊社)
 - ・飯田泰彦「小浜島の結願祭」(『あかがーら』〈第6号〉石垣市立図書館)
 - ・黒島精耕『小浜島の歴史と文化』(私家本)
 - ・杉本信夫「小浜島の古謡—神酒ぬカンザリ、アヨー、ユングトゥ、ユンタ、ダートゥーダー、わらべうた—」(『八重山、竹富町調査報告書(2) 一地域研究シリーズNo.28—』沖縄国際大学南島文化研究所)
 - ・野原三義「八重山竹富町小浜方言の助詞(2)」(『八重山、竹富町調査報告書(2)』沖縄国際大学南島文化研究所)
 - ・杉本信夫「小浜島の古謡について」(黒島精耕『小浜島の歴史と文化』私家本)
 - ・尾方隆幸「沖縄の離島における観光地域の構造—座間味島と小浜島の比較研究—」(『沖縄地理』〈5〉沖縄地理学会)
 - ・加藤富美子「地域の音楽の学習における学校の教育力—沖縄・小浜島の一教師と教え子のライフヒストリーを通して—」(『音楽教育学研究1』音楽之友社)
 - ・加藤富美子「沖縄・小浜島の音楽ジャンルとレパートリーの伝承とその要件」(『民俗音楽研究』〈25〉日本民俗音楽会)
- 2001年
- ・「小浜島の岩石」『おきなわの石ころと化石—島じまの地層めぐり—』(編集工房東洋企画)
 - ・『情報 やいま』〈No.97〉(南山舎)
 - ・大田将之「島々の芸能⑥ 小浜島 ダートゥーダー」(『あかがーら』〈第14号〉石垣市立図書館)
 - ・「『聖地めぐり』照後御嶽」(『竹富町史だより』〈第20号〉竹富町)
 - ・大盛永意『毛裔氏・小宗安連と後裔』(私家本)
 - ・「『鉄田義司日記』補遺 小浜島」(『竹富町史だより』〈第20号〉竹富町)
 - ・「ちゅらさんの生まり島 小浜島」(『うるま 2001年11月号』〈通巻第44号〉三浦クリエイティブ)
 - ・金城聖二『父との約束』(グローバル企画)
 - ・松村正治「八重山諸島におけるツーリズム研究のための基礎調査—竹富島・西表島・小浜島の人々と自然とのかかわりの変遷—」(『アジア・太平洋の環境・開発・文化2 特集沖縄—離島の架橋・埋め立て・観光開発—』未来開拓大塚プロジェクト事務局)
- 2002年
- ・つちだきくお『ニロースク 小浜島の風便り』(ハーベストファーム)
 - ・矢野敬生・中村敬・山崎正矩「沖縄八重山群島・小浜島の石干見」(『早稲田大学人間科学研究』〈15-1〉早稲田大学人間科学部)

- ・加藤富美子「小浜島における民俗音楽の伝承と個人の役割」〔修士論文〕
- ・仲盛長儀「ちゅらさんの島、小浜島」(『琉球新報』『南風』欄2002年1月11日付)→2025年
- ・仲盛長儀「頼もしい島の新成人」(『琉球新報』『南風』欄2002年1月25日付)→2025年
- ・仲盛長儀「往年の島の物産」(『琉球新報』『南風』欄2002年2月8日付)→2025年
- ・仲盛長儀「壬午年にちなみ」(『琉球新報』『南風』欄2002年2月23日付)→2025年
- ・大久研一「楽しく夢のある農業目指す」(『情報やいま』〈No.111〉南山舎)
- ・平田大一「大一がゆく 第63回 海を渡る魂」(『情報やいま』〈No.111〉南山舎)
- ・仲盛長儀「うりずんの季節」(『琉球新報』『南風』欄2002年3月8日付)→2025年
- ・仲盛長儀「巣立ち行く島の子」(『琉球新報』『南風』欄2002年3月22日付)
- ・「表紙の写真:小浜島嘉保根御嶽結願祭」『竹富町史だより』〈第21号〉(竹富町)
- ・仲盛長儀「年度の初め」(『琉球新報』『南風』欄2002年4月5日付)→2025年
- ・仲盛長儀「竹と横笛」(『琉球新報』『南風』欄2002年4月19日付)→2025年
- ・「12年に一度の午年に託した名馬「小浜馬」復活の願い」(『情報やいま』〈No.113〉南山舎)
- ・大久研一「土地を遊ばさない工夫」(『情報やいま』〈No.113〉南山舎)
- ・平田大一「大一がゆく 65 『大一がゆく、大地をゆく』」(『情報やいま』〈No.113〉南山舎)
- ・仲盛長儀「祭祀と五穀豊穰」(『琉球新報』『南風』欄2002年5月17日付)→2025年
- ・仲盛長儀「ちゅらさんの島の小浜節」(『琉球新報』『南風』欄2002年5月31日付)→2025年
- ・仲盛長儀「島のハーリー」(『琉球新報』『南風』欄2002年6月14日付)→2025年
- ・仲盛長儀「長幼の序」(『琉球新報』『南風』欄2002年6月28日付)→2025年
- ・大久研一「若者が魅力の持てるさとうきび農業」(『情報やいま』〈No.115〉南山舎)
- ・平田大一「大一がゆく 第67回 久留島武彦文化賞」(『情報やいま』〈No.115〉南山舎)
- ・大田将之「島々の芸能14 小浜島 舟ぬユングトゥ」(八重山地域字用法センター編『あかがーら』〈第22号〉石垣市立図書館)
- ・松村正治「竹富島と小浜島の比較環境史一町並み保存運動とリゾート施設誘致への序曲一」(松井健編『開発と環境の文化学』榕樹書林)
- ・大木隆志「八重山を見はらす格好の展望台 大岳-アカヤ崎(小浜島)」『海と島の景観散歩 沖縄地図紀行』(ボーダーインク)
- ・森口轄「沖縄・孤島の新地図22 小浜島 砂糖きび畑の〈まれびと〉たち」(『週刊 金曜日』〈10-10〉金曜日)→2005年
- ・平凡社地方資料センター編「小浜島」「小浜村」「嘉保根御嶽」『日本歴史地名大系第48巻 沖縄県の地名』(平凡社)
- 2003年 ・下川裕治・ゼネラルプレス編著「ちゅらさん2 小浜島ロケに同行する」「小浜島 パイナップル・キビ・ゴマ アイデアは尽きない」『好きになっちゃったアジア 新・好きになっちゃった沖縄の離島』(双葉社)
- ・「竹富町・島々の織物文化 小浜島」『竹富町史だより』〈第23号〉(竹富町)
- ・石垣久雄「小浜島のカジマヤー」(『琉球新報』『南風』欄2003年8月29日付)
- ・「『写真に見るわが町』22 高等弁務官の贈り物」『竹富町史だより』〈第24号〉竹富町)
- ・石垣久雄「山の子守唄」(『琉球新報』『南風』欄2003年12月5日付)

- ・coralway編集部編「小浜島ーサトウキビの太い根っこを探してー」『沖縄島々日和 宮古・八重山編』(新潮社)
- ・高橋誠一「竹富島・黒島・新城島・小浜島の集落」『琉球の都市と村落』(関西大学東西学術研究所)
- ・加藤富美子「個人史からとらえた小浜島の音楽伝承」(『音楽学』〈49-1〉日本音楽会)
- ・さとなお「灼熱ムンチャーズ」「モーズク春ですねえ♪」『沖縄上手な旅ごはん』(文藝春秋)
- 2004年 ・宮良作「特攻隊基地と戦争マラリアー小浜島の場合ー」『沖縄戦の記録 日本軍と戦争マラリア』(新日本出版社)
- ・『シマー琉球大学民俗学実習調査報告書ー 第6号』(琉球大学法文学部人間科学科民俗学研究室)
- ・通事孝作「〈むかし八重山第83回〉高等弁務官の贈り物」(『月刊やいま』南山舎)
- ・通事孝作「漂流者の墓碑」(『琉球新報』「落ち穂」欄2004年8月31日付)
- ・松村正治「開発と環境のジレンマー八重山諸島の最適ツーリズム戦略ー」『島の生活世界と開発3 沖縄列島ーシマの自然と伝統のゆくえー』(東京大学出版会)
- ・沖縄県立博物館編『小浜島総合調査報告書』(沖縄県立博物館)
- ・與那嶺一子「小浜島の染織概観」(『小浜島総合調査報告書』)
- ・『民俗研究ー小浜島の結願祭調査報告ー』〈第32号〉[「はじめに」、第1章「小浜島の社会組織」、第2章「聖地と祭祀組織(ヤマニンズー)」、第3章「年中行事と祭祀記録」、第4章「神役組織」、「おわりに」](沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科南島民俗研究室)
- ・黒島精耕「「山の子守唄」の碑をわがふるさとの地に」(『宮良長包生誕百二十年記念誌 ふるさとの風』宮良長包生誕百二十年記念事業期成会)
- ・大島修「「山の子守唄」の歌碑建立を喜ぶ」(『宮良長包生誕百二十年記念誌 ふるさとの風』宮良長包生誕百二十年記念事業期成会)
- ・「山の子守唄」(『宮良長包生誕百二十年記念誌 ふるさとの風』宮良長包生誕百二十年記念事業期成会)
- ・カベルナリア吉田「船が向かった先で待つ、めくるめく島々の夜」『沖縄の島へ全部行ってみたサー』(東京書籍)
- 2005年 ・森口轄「砂糖きび畑の〈まれびと〉たちー小浜島」『だれも沖縄を知らない 27の島の物語』(筑摩書房)←2002年
- ・加賀谷真梨「沖縄県・小浜島における生涯教育システムとしての年中行事」(『日本民俗学』〈第242号〉日本民俗学会)
- ・大城直樹「八重山諸島・小浜の集落立地と生活様式」(平岡昭利編著『離島研究 II』海青社)
- ・前花哲雄「小浜島の牧」(『かがやけ肉用牛』社団法人沖縄県肉用牛生産供給公社)
- ・「特集 スローに巡る南の島々 竹富島・石垣島・小浜島の移住者が営む店・宿」『沖縄スタイル』〈8〉(エイ出版社)
- ・比嘉朝進「嘉保根御嶽」『沖縄拝所巡り300』[改訂版](那覇出版社)
- 2006年 ・竹富町教育委員会・小浜島の芸能記録作成調査委員会編『記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財 小浜島の芸能 民俗文化財地域伝承活動(資料作成・周知)報告書』(竹富町

教育委員会、以下『小浜島の芸能』)

- ・仲盛長義・石垣久雄「小浜島の概要」(『小浜島の芸能』)
- ・仲盛長義・上盛政秀・石垣久雄・波照間永吉「小浜島の盆行事の芸能」(『小浜島の芸能』)
- ・仲盛長義・花城正美・上盛政秀・大城學「小浜島の結願祭の芸能」(『小浜島の芸能』)
- ・仲盛長秀・石垣繁「小浜島の種子取祭の芸能」(『小浜島の芸能』)
- ・波照間永吉「小浜島の芸能の特質」(『小浜島の芸能』)
- ・崎原孫佳『二人三脚』(自分史センター)
- ・松島泰雄「八重山諸島における「経世済民」の実践 人間の結び合いを発展の土台にしている島々」『琉球の「自治」』(藤原書店)
- ・『地域と教育 一沖縄県小浜島一 筑波大学博士課程人間総合科学研究科学学校教育学専攻「社会科教育学演習Ⅰ」調査報告』〈第5号〉(筑波大学博士課程人間総合科学研究科学学校教育学)
- ・井田仁康「はじめに」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)
- ・宮崎沙織「沖縄県小浜島における集落と学校教育の関係」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)
- ・林琢也「沖縄県小浜島における環境教育の授業構想―「thinking globally, and act locally」の実現を目指して―」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)
- ・國分麻里「東アジアを視野に入れた中学校近現代史地域史学習の内容構成―八重山群島の製糖業を事例として―」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)
- ・高松佳恵「小浜島小中学校と小浜島民俗資料館の連携による地域学習の可能性」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)
- ・斎藤之誉「風水モデルを活用して景観の秩序を解釈する文化学習―沖縄県小浜島の風水景観を中心にして―」(『地域と教育 一沖縄県小浜島一』筑波大学)

2007年 ・得能壽美『近世八重山の民衆生活史』(榕樹書林)

- ・安本千夏「仲盛トミ・花城キミ」(『月刊やいま』〈2007年7月号〉南山舎)→2015年
- ・成底哲『島に生きて 一父武雄を偲ぶ一』(成底哲)
- ・大盛永意「安らぎ与える《小浜節》」(『琉球新報』2007年11月9日付)→2013年
- ・仲盛鎮夫『「天祐神助」我来し方を省る』(私家本)
- ・矢野敬生・中村敬「沖縄・小浜島の石干見」(田和正孝編『石干見―最古の漁法―』法政大学出版局)
- ・「藍の故郷、小浜島へ」『季刊 銀花 2007 冬』〈第152号〉(文化出版局)
- ・野本三吉「ダートゥダーの島・小浜」『海と島の思想―琉球弧45島フィールドノート―』(現代書館)
- ・平田大一『南風・海風に吹かれて』(かんき出版)
- ・加賀谷真梨「シマの維持存続をめぐる女性の多様な実践 沖縄・小浜島を事例に」(『くにたち人類学研究』〈2〉くにたち人類学会)

2008年 ・安本千夏「慶田盛英子」(『月刊やいま』〈2008年5月号〉南山舎)→2015年

- ・「『ちゅらさん』の島 小浜島」『LOCATION JAPAN』〈2008年8月号〉(地域活性化プランニ

ング)

- ・藪内博行「一枚の写真 結願祭・小浜島」『約束の島、約束の祭—祈り踊る沖縄島人が僕にくれたもの—』(情報センター出版局)

2009年 ・「小浜島の戦跡」『沖縄戦跡ブック ガマ』(沖縄時事出版)

- ・花城正美「生活・総合への提言—様々な自然界のサイクルを体感すること—」(佐々木秀樹編『生活&総合教室』〈No.56〉日本文教出版株式会社)
- ・斎藤之誉「風水モデルを活用して景観秩序を解釈する地理学習 沖縄県小浜島と韓国公州市旧市街を事例にして」(『藤沢学際ジャーナル』〈17-1〉藤沢大学経済学会)
- ・波平長真「ルポ学校農園 沖縄県小浜小中学校 —「まいふな—ファーマー」 イネや野菜類の無農薬栽培で、生きた「食育」を—」(『教育ジャーナル』〈2009年8月号〉学習研究社)

● 2010 年代

2010年 ・福元大輔「シュガーロード」(『沖縄タイムス』2010年2月18日付)→2013年

- ・記念誌編集委員会編『小浜中学校創立六十周年記念誌 若松』(小浜中学校創立六十周年記念事業期成会)
- ・宮良安彦「小浜島の結願祭」(『沖縄・八重山文化研究会会報』〈第211号〉沖縄・八重山文化研究会)
- ・宮良安彦「〈文化〉小浜島の結願祭」(『八重山毎日新聞』2010年10月3日付)
- ・加藤富美子「小浜島の《いらんぞーさ》の伝承をめぐる」(藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡』音楽論叢)
- ・森まゆみ「手にビール、空に満天の星—小浜島(沖縄)—」『海に沿って歩く』(朝日新聞出版)

2011年 ・稲福義男「ククル嶽はクカル嶽—クカル嶽は波照間森である—」(『八重山毎日新聞』2011年9月25日付)

- ・『竹富町史 第三巻 小浜島』(竹富町)
- ・久保田鷹光「小浜島」『琉球列島 マングローブと生き物探しの旅』(ブックコム)
- ・須藤義人「琉球弧のマレビト芸能への眼差し—来訪する神々の姿かたちを求めて—」『マレビト芸能の発生—琉球と熊野を結ぶ神々—』(芙蓉書房出版)
- ・久保田鷹光『琉球列島 マングローブと生き物探しの旅 西表島・小浜島・石垣島・与那国島・宮古島・沖縄本島・南大東島・奄美大島』(ブックコム)
- ・森隆男「住まいの変容と伝統儀礼 沖縄県小浜島のヒンプンを中心に」(『関西大学東西学術研究所紀要』〈44〉関西大学東西学術研究所)
- ・比嘉誠・牧野清人「小浜島細崎における漁村活性化の取り組み」(『漁港』〈53-1〉全国漁港漁場協会)

2012年 ・大石直樹「霊石を山から転がすわけ(小浜島の話)」「金星はファイダマー星(小浜島の話)」
「生える場所が決まっている木々たち(小浜島の話)」「しんせき思いのハリセンボン(小浜島の話)」
「頭に身がつまっているミーバイ(小浜島の話)」『なぜなぜ八重山の民話—空・動物・草木海—』(大石直樹)

・「沖縄県小浜島における集落と学校教育の関係」(井田仁康編著『地域と教育 地域における

教育の魅力』学文社)

- ・「『写真に見るわが町』28 ウミンチュの村」『竹富町史だより』〈第33号〉(竹富町)
- ・新本光孝『小浜島の近現代の人物略伝—明治・大正・昭和に生きる—』(私家本)
- ・石垣博孝「書評『竹富町史 第三巻 小浜島』—小浜島を知るための手引きに—」(『八重山日報』2012年7月13日付)→『竹富町史だより』〈第34号〉2013年
- ・杉本信夫「書評『竹富町史 第三巻 小浜島』—壮大な生活文化の叙情詩—」(『沖縄タイムス』2012年8月4日)→『竹富町史だより』〈第34号〉2013年
- ・波照間永吉「書評『竹富町史 第三巻 小浜島』—「果報の島」の歴史と文化—」(『琉球新報』2012年8月12日)→『竹富町史だより』〈第34号〉2013年
- ・黒島精耕『ダートゥーダー探訪の旅—小浜島民俗歌舞の源流をたどる—』(沖縄自分史センター)
- ・大城學「『竹富町史 第三巻 小浜島』を読む」(『八重山毎日新聞』2012年10月20日付)→『竹富町史だより』〈第34号〉2013年
- ・飯田泰彦「誘い 黒島精耕『ダートゥーダー探訪の旅』出版祝賀会」(『八重山毎日新聞』2012年)
- ・岡絵里子・福本優「小浜島集落の敷地と住まいの変容について—八重山諸島の風土的集落の変容に関する研究—」(『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』〈52〉)
- ・カベルナリア吉田「ムンツァン捕り」『さすらいの沖縄伝承男』(株式会社林檎プロモーション)

- 2013年
- ・加賀谷真梨「地球ミュージアム紀行 島の営みがつまった民俗資料館—沖縄・小浜島—」(『月刊 みんぱく』〈37-7〉国立民族学博物館)
 - ・福田晃「八重山・竹富島小浜島を訪ねる」『沖縄の伝承遺産を拓く 口承神話の展開』(三弥井書店)
 - ・仲盛康治「羽ばたけ子らよ！—仲盛治の足跡—」(私家本)
 - ・「『竹富町史』第三巻「小浜島」を発売—島の歴史・伝統文化など網羅—」→『竹富町史だより』〈第34号〉(竹富町)

- 2014年
- ・飯田泰彦「踊り・狂言・歌・遊び17 《小浜節》のスケール感」(『情報やいま』〈2014年10月号〉南山舎)
 - ・『花城家の家系図関係』(私家本)
 - ・日本民話の会編「ニワトリが朝に鳴くわけ(八重山・小浜島)」『新しい日本の語り10 むねがたいの会の語り』(悠書館)
 - ・カベルナリア吉田「ちゅらさんでもリゾートでもない小浜島」『石垣宮古ぐだぐだ散歩』(イカロス出版)
 - ・馬原史子・聞き手/山本拓也「インタビュー・ルーム900 離島観光リスクを知って 馬原史子さん(29) 小浜島診療所医師」(『厚生福祉』時事通信社)

- 2015年
- ・安本千夏「母、貞子を偲ぶ手技に生きて(仲盛トミ・花城キミ)」『小浜の宝、シマアイと共に(慶田盛英子)』『島の手仕事—八重山染織紀行—』(南山舎)
 - ・KBG84「笑顔で花を咲かせましょう 歌って踊るオバアたちが紡いだ「命の知恵」」(幻冬舎)

- ・館浦あざらし責任編集『北海道人のための南の島ガイドブック 石垣島・竹富島・小浜島・波照間島・黒島・西表島・屋久島・沖縄本島』(海豹舎)
- 2016年 ・池上永一「小浜島」『続ばる島』(KADOKAWA)
- ・石垣佳彦「石垣佳彦写真館 踊る小池百合子」(『月刊 やいま』〈No.274〉南山舎)
- ・只野英比古「沖縄県西表島・竹富島・小浜島・由布島・瀬長島 八重山諸島その1 秘境、知られざる歴史」(『日本主義』〈34〉白陽社)
- 2017年 ・森隆男「通過儀礼の動線からみた南西諸島の住まい」『クチとオク ―住まいの民俗学的研究の一視座―』(清文堂出版株式会社)
- ・石垣繁「小浜島の種子取祭」「小浜島の種子取祭の儀礼課程」『八重山諸島の稲作儀礼と民俗』(南山舎)
- ・大盛永意『小浜島 南風川田オナリ考』(私家本)
- ・阿川尚之「地域は舞台 うふたき会と小浜島ばあちゃん合唱団(沖縄県竹富町)―「タピスカロイ」を祈る人たち 沖縄県竹富町小浜島への旅―」(『アステイオン』〈87〉)
- 2018年 ・花城正美「初の離島合宿〈小浜島〉の思い出」(山里純一編著『「八重芸」五十年 琉球大学八重山芸能研究会創立五十周年記念誌』琉球八重山芸能研究会)
- ・「沖縄県小浜島 天然モズクの特産品づくりと直販」(『しま』〈63-3〉日本離島センター)
- ・「小浜島の結願祭 北部落の「初番狂言」」『竹富町史だより』〈第42号〉(竹富町)
- ・宮里儉治『クモーマ スィマヌ、クトゥバ』(私家本)
- ・「44 小浜島」『沖縄の民俗資料』〈下巻〉(沖縄県教育委員会)
- ・林研三「八重山諸島・小浜島の事例 その1」(『札幌法学』〈29-1・2〉札幌大学法学部)
- 2019年 ・李春子「小浜島(4カ所―嘉保根御嶽、仲山御嶽・佐久伊御嶽、照後御嶽・川田御嶽、ナカンド御嶽―)」『八重山の御嶽―自然と文化―』(榕樹書林、2019年)
- ・花城正美「我が小浜島の稲作とお嶽一唄を通して―」(李春子編著『八重山の御嶽―自然と文化―』榕樹書林)

● 2020 年代

- 2020年 ・松本由香・佐野敏行「染め織りによる小浜島の高齢女性の暮らしのいろいろ」『沖縄の染め織りと人びとの暮らし―家族と地域文化、経済とツーリズムから考える―』(琉球新報社)
- ・「竹富町における戦災状況 2. 島々の戦災状況 (2)小浜島」『竹富町史だより』〈第44・45号合併号〉(竹富町)
- ・「島々の踊り・狂言No.7〈長者の大主〉系芸能―竹富町の民俗芸能にみる― 3〈長者の大主〉系芸能のいろいろ (2)村の役人 ①村の役人の祝言と子・孫たちの芸能づくり ●小浜島南村の「シュンギン」(結願祭)」『竹富町史だより』〈第46号〉(竹富町)
- ・「島々の踊り・狂言No.7〈長者の大主〉系芸能―竹富町の民俗芸能にみる― 3〈長者の大主〉系芸能のいろいろ (2)村の役人 ③村の役人の祝言と超人的な役柄による五穀の授受、そして子・孫達の芸能づくり ●小浜島北村の「初番狂言」(結願祭)」『竹富町史だより』〈第46号〉(竹富町)
- ・花城正治編著『加屋眞家の由来―与那原山戸翁の足跡―』(私家冊子)

- ・伊藤紫「地域に根ざす手織物―八重山地域 小浜の事例―」〈修士論文〉
- 2021年 ・「成底トヨ」(『企画展 沖縄の藍 ―自然と人が織りなす製藍の技―』沖縄県立博物館・美術館)
- ・藤田喜久・佐伯智史・仲吉将一・福島新・成瀬貫「八重山諸島小浜島より記録されたヤエヤマ ヤマガニ(甲殻亜門:十脚目:短尾下目:サワガニ科)」(『日本甲殻類学会 Original Paper Cancer』〈30〉日本甲殻類学会)
- ・大盛聡「一九六六年の小浜島」(竹富町史編集委員会編『竹富町史 第十一巻 資料編 新聞集成Ⅷ』竹富町教育委員会)
- ・「竹富町とコロナ・コレラ・アレコレ 3 年中行事にみる悪疫退散の願い (4)小浜島」『竹富町史だより』〈第47号〉(竹富町)
- ・『小浜島の自然・暮らし・文化―山・里・海を繋ぐ―』(小浜公民館、総企画/李春子)
- 2022年 ・東田盛善・平安瞳・蔵元里佐子・宮城風香・比嘉拓未・喜納優香・新垣雄光「沖縄県小浜島の地下水の水質と保全」(『工業用水』〈No.672〉)
- ・知念かねみ『祭りを支える 小浜島の染め織り 知念かねみ写真集』(私家本)
- ・「豊年祭:アソノ葉餅/小浜」「豊年祭:シネー/小浜」「きび収穫:呉汁/小浜」「法事料理:イラキムヌ/小浜」「紅芋:アッチーニ/小浜」『竹富町食生活改善推進協議会結成30周年レシピ集 島の味歳時記』(竹富町食生活改善推進協議会)
- ・地球の歩き方編集室「小浜島―のどかな自然風景が広がる素朴さが魅力の島―」『地球の歩き方 島旅20 石垣島 竹富島 西表島 小浜島 由布島 新城島 波照間島』(株式会社地球の歩き方)
- 2023年 ・ヒュー・クラーク「小浜島で方言調査」(『琉球文学大系〈月報4・第2巻附録〉』ゆまに書房)
- ・ヒュー・クラーク「小浜島とオモロを結ぶ」(『琉球文学大系〈月報4・第2巻附録〉』ゆまに書房)
- ・大濱聡『「ちゅらさん」異聞 ―大ヒットドラマ誕生の思い出―』『わが内なる沖縄、そして日本―ある放送人が見つめた昭和・平成史―』(ボーダーインク)
- 2024年 ・松森晶子「八重山語小浜方言の三型体系における各韻律型の所属語彙」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』〈第30号〉日本女子大学文学部)
- ・松森晶子「八重山語小浜方言の音律特徴と韻律大系変化のプロセス」(『日本女子大学文学部紀要』〈第73号〉日本女子大学大学院文学研究科)
- ・石垣佳彦「幸せに満ちた祝家」(『月刊やいま』〈No.360〉南山舎)
- ・通事孝作「むかし八重山第280回 小浜製糖(株)が中型製糖工場に規模拡大しての島の糖業」(『月刊やいま』〈No.360〉南山舎)
- ・花城正美「どうぞ第15回小浜節大会に」(『八重山毎日新聞』2024年10月31日付)
- 2025年 ・仲盛長儀「小浜島の概要」(『竹富町史だより』〈第55号〉竹富町)
- ・仲盛長儀「小浜島―果報ぬ島・ちゅらさんの島―」(『竹富町史だより』〈第55号〉竹富町)
- ・花城正美「平成2年度の小浜公民館資料」(『竹富町史だより』〈第55号〉竹富町)
- ・『「琉球諸島探訪記―崎原恒新ノート―」にみる小浜島記事』(『竹富町史だより』〈第55号〉竹富町)
- ・「小浜島に関する資料」(『竹富町史だより』〈第55号〉竹富町)

浦内公民館の活動

—学校5日制と地域の課題を中心に—

浦内公民館館長 田 代 馨

1 はじめに —浦内の歴史—

西表島の村落は、周囲をとり囲むように山を背にしたかたちで、海岸低地にできています。浦内は方言で「ウラチ」と呼ばれていました。明治末期ごろ、浦内川河口に今の上原部落が廃絶し、その残存者たちが移住して建てた村落と伝えられています。大正末期には、さらに干立部落へと移住して、一時部落は廃絶しました。

1935年（昭和10）前後に宇多良炭坑が栄えたころ、坑主「野田氏」がここに本宅を構え、うなり崎に牧場と農場を経営し、その従業員たちによって新しい村落が、現在の月が浜周辺に発生しました。昭和20年代、その本宅敷地内に、上原小学校の発祥となった私設「みどり学園」が炭坑従業員の子供たちの教育を目的として設立されました。

私も当時通学を許可され、当時は道路もなく、上原部落から獣道に近い草むらのなか、裸足で通学しました。そのことは今も懐かしい思い出として残っております。

村が栄えていたころは、祭りも行なわれ、旗頭を納める倉庫もあったと聞きますが、今は浦内部落跡遺跡（埋蔵文化財）とされる地には、井戸や塀、住宅に使用したであろうレンガ、その他ビール瓶などが残されているだけで、身近に祀る御嶽も忘れられています。

昭和50年代後半に、新しい集落として、町有地の住宅開発とともに部落の再生が進み、1985年（昭和60）に初代公民館長に永田欣也氏を選出しました。当初、公民館はテント集会施設であったので、会員からは「早く公民館の建設を」という願いのもと、公民館期成会を立ち上げ、1998年（平成10）に「沖縄県中山間地域総合整備事業」の一環で、待望の公民館が新たに浦内地域活性化施設として建設され、現在17年目を迎えました。

2000年（平成12）、上原小学校は開校50周年の記念として、「みどり学園跡地」の碑をPTAと当時の生徒だった永田欣也氏らの手で建立しました。

2001年（平成13）10月の調べによると、浦内地域の世帯数は36戸、人口は86人（男42人、女44人）です（竹富町役場福祉課）。生徒数は上原小学校10人、船浦中学校3人。

あのテント集会施設から夢が実現したが、その一方で現在は何かにつれ共同意識が薄れつつあるようにも思われます。

2 平成13年度の公民館活動

1985年（昭和60）、公民館を立ち上げ、会員の公民館にける意識も高く、活動も会員の積極的な

参加により地域が一体となり、今日に至っています。

2001 年度の公民館役員は次のとおりです。総務は前年度の公民館館長、副公民館長があたることになっています。

公 民 館 長	田 代 馨
副 公 民 館 長	中 神 明
幹 事	金 高 博 史
総 務	新 城 泉 森 本 孝 房
婦 人 部 部 長	奥 田 怜 子
副 部 長	河 合 優 子
子 供 育 成 会 会 長	宮 城 洋 子
副 会 長	新 城 美 貴 子

浦内公民館の主な公民館活動として、「納涼祭り」の開催を挙げることができます。この祭りは、公民館行事のなかでも、もっとも会員に親しまれ、親睦を図るための行事として、毎年、竹富町の「一島一祭事業」を利用して実施しています。

その他、1999 年度（平成 11 年度）から公民館スポーツ学級と称して親子による対抗・会員同志のチャンピオン大会を催し、さわやかな汗をかきつつ親睦を図っています。また、年度の締めくくりとして、新年会も盛大に実施しています。

2011 年度（平成 13 年度）の浦内公民館の主なる活動は次の表のとおりです。

月	活 動 内 容
4 月	・ 2001 年度（平成 13 年度）定期総会。 ・ 上原地区連合公民館評議委員会総会に参加。
5 月	・ 2001 年度（平成 13 年度）町長に要請。 ・ 上原地区連合公民館転入者歓迎会に参加。 ・ 春の清掃（集落内、及び県道）。
6 月	・ 町民球技大会に参加。男子グランドゴルフで準優勝。 ・ 上原塵芥処理場の清掃。
7 月	・ 納涼祭（一島一祭事業）。
8 月	・ ばいぬ島まつりに参加。公民館対抗綱引大会にて、男子優勝、女子準優勝。
9 月	・ デンサ節大会に参加、協力。 ・ 上原塵芥処理場の清掃。 ・ ばいぬ島まつりの公民館対抗綱引大会における男子優勝・女子準優勝の祝勝会。→中野公民館と合同で競技に参加したので、祝勝会も合同で開催。 ・ 上原小学校運動会にて、部落対抗リレーに参加し、浦内チームは 4 位。 ・ 上原地区連合公民館主催の敬老会に参加・協力。

月	活 動 内 容
10 月	・ 秋の浦内地域内清掃。 ・ 臨時総会に向けた役員会。
11 月	・ 臨時総会。 ・ 竹富町公民館連絡協議会の参加に向けた役員会。
12 月	・ 竹富町公民館連絡協議会に参加。 ・ 浦内公民館忘年会。 ・ 上原塵芥処理場の清掃。 ・ 花卉苗植え作業。
1 月	・ 上原地区連合公民館主催の成人式に参加・協力。 ・ 浦内公民館新年会。
2 月	・ やまねこマラソンに協力。
3 月	・ 上原塵芥処理場の清掃。 ・ 2001 年度（平成 13 年度）決算総会。

3 学校5日制と地域の課題

2002 年度（平成 14 年度）から実施される学校 5 日制度の導入は、社会情勢の目まぐるしい変化のなかで、子供たちにも厳しい対応が迫られる時がくるでしょう。

この激しい変化に子供たちはどのように立ち向かっていくのでしょうか。また、自分自身で考える力、判断する力を、いかに身につけていくのでしょうか。

それらは学校での学習体験を通じて学ぶこともできますが、とりわけ地域の自然・文化・歴史についての学習は、地域の環境のなかでの体験を通した取り組みが重要になってくるのではないのでしょうか。地域での体験学習によって、子供たちは豊かな感性とたくましさを身につけるものと思われます。そして、これをもとにして成長し、より広い世界への飛翔が期待できるのではないのでしょうか。

NHK 放送の番組を参考にしますと、番組は基礎的な学習と総合的な学習という二つの視点から構成されていることが分かります。言い換えると、基礎的な教養を基盤とし、それらを踏まえ自分自身で考え、判断できる能力を養うことを意図して番組が構成されているものと思われます。

学校を離れた家庭や地域では、子供たちのゆとりのなかから、家庭体験・自然体験・社会体験をいかにプログラム・立案し、このような体験学習のなかから、学ぶ場をいかに提供できるかを考える必要があります。

特に、地域においては、学校 5 日制が導入・実施されたとき、毎週土曜日、日曜日といった「ゆとり」の時間をどのように活かすかが課題になってきます。課題をどのように解決していくのか模索しなければなりません。子供たちの就学時間の減少という流れのなかで、地域の果たす役割の重要性は増してくるのはまちがいありません。

そのようななか、「浦内子供会」の活動は、多くの素晴らしい指導者に支えられ頼もしいものです。子供会の運営には、竹富町から道路清掃の委託をとりつけて活動資金としています。このことも子供

たちが協力し、地域の美しい環境を維持しているという責任感と誇りを涵養することに一役かっているということがいえるでしょう。

学校5日制度が始まる前、今こそ学校・行政・地域（公民館）が協力し、その対応に取り組み、準備を整えておく時ではないでしょうか。

ここでは公民館の取り組みとして、次の3点を提案しておきます。

(1) 子供たちが集まりやすい環境の提供

浦内公民館は児童書を多数蔵書しており、それらを開放することによって、子供たちの読書に対する意識・意欲を高め、読書活動を促進させます。

(2) 子供たちに適したプログラムの作成

太鼓、三味線、染色、織物、陶芸など、文化的なプログラムから、グラウンドゴルフや卓球、バレーボールなどのスポーツに関するものなど、多彩なプログラムの作成が求められています。また、当地区には専門的知識を持った人材も豊富で、このような人材やお年寄りの知恵を活かしたプログラムを考案することにより、地域も活性化するものと思われます。

また、関心・興味は各人各様なので、一人ひとりに応じたきめ細やかなプログラムの実現をめざしたいものです。これらを組合わせたバラエティー豊かなプログラムの創出が今後の課題です。このような企画を実現させるコーディネーターをはじめ、人材育成にも配慮する必要があります。

(3) 交流の場の創出 ― 会員のみんが参加できる場、子供たちの成長の場 ―

現代、少子化社会や共働きの生活者の増加が進むなか、子育てを一人で抱えこむことのストレスと家庭の閉鎖性が指摘されています。そのようななかで、子供たちを地域のみんなで見守り、サポートすることは、今日の社会問題の解決に一役かうことになるかもしれません。

そのとき子供会活動が注目できます。今、日曜日になると、自発的に公民館で子供たちを遊ばせる園児のお母さんがいます。いつの間にか、一人、二人と子供たちの数が増え、自然に大きな流れが生まれています。このことが新たな子供会活動や、さらには公民館活動につながっていく可能性を感じます。そしてこのような場で育った子供たちが、やがて新しい浦内地域をつまっていくなか、期待しています。

4 事例報告 バナナ・クッキー作り

2001年（平成13）の本事例は、ある会員の「たくさんもらったバナナをどうしようか？」という問いから始まりました。

11月3日、5年生女子は、焚き火でクッキーを焼きました。もらったバナナが食べきれず、それが黒くなっていくことが気になり、お父さんが思いつきで、「クッキーでも焼くか！」と子供たちに話したことが発端でした。ならば「輝子が上手なはず」と女子たちが盛り上がりました。「それなら女の子全員に声をかけて！」と相なった次第です。

中神家も初体験。誰も先生はいません。だから、いろんな発見がありました。「わかったさん」のレシピを台所の壁に貼り出しました。

薪拾いは、台風で寄せられた流木がたくさんあり、拾う手間もかかりませんでした。火力によって時間が異なりました。最初は強火で焼きすぎ 10 分かかりました。5 分、3 分と繰り返すうちに、3 分ぐらいで OK だと分かりました。

ついでに、その日に届いたジャガイモとサトイモも焼いて食べました。

〈開催日〉 2001 年 11 月 3 日（土）午後 1:00 — 午後 6:00

〈参加者〉 上原小学校児童 6 名。前原輝子（5 年）、前原加奈子（3 年）、高橋みか（5 年）、清水みなみ（5 年）、中神優（5 年）、中神遥（5 年）。

〈父 母〉 中神千鶴子・中神明

子供たちの感想

・今日、わたしたちの家でクッキー作りをしました。

最初は、こげたクッキーだったけど、あとからだんだんうまくできてうれしかったです。たいへんだった所は、まきひろいです。とげがあって、いた木もあったけれども、くろうしかいでその木がよくもえてうれしかったです。

こんどは、5 年生みんなで、やってみたいです。すばらしい思い出になりました。（優）

・今日、クッキー作りをしました。

こげたクッキーばかりだったけど、楽しかったです。（加奈子）

・今日クッキー作りをして、いろんな形を作り、楽しかったです。焼くとこげたりしたけど、最後にきれいにやけて、うれしかったし、おいしかったです。（輝子）

・今日、クッキー作りをしました。こげたのもあるけどたのしくて、おいしかったです。いい経験でした。また、やりたいです。（みか）

・私は、クッキー作りをしてこげたけどけっこうたのしかったです。たべたらとてもおいしかったです。（みなみ）

・今日は、まき拾いからクッキー作りをしました。だっちおーぶん（昔カーボーイがごはんの時につかってたおなべ）でつくりました。最初は、こげこげで食べれなかったけど二回目からは、お店に売っているクッキーよりかとってもおいしかったです。また機会があったらいろんな物を作りたいです。（遥）

5 平成 13 年度 浦内子供会活動

月	活 動 計 画
5 月	・ 5 日、こどもの日バーベキュー大会。午後 8 時より映写会。 ・ 5 日、「年間行事計画」についての話し合い。 ・ 19 日、春の清掃日。部落内道路、及び活性化施設の清掃。 ・ 20 日、竹子連総会（育）西村（子）太一、芳一参加。 ・ 母の日、父の日に向けてのプレゼント作り。
6 月	・ 30 日、竹子連臨時理事会参加。（育）宮城。
7 月	・ 17 日、子供会。「夏休みの計画」についての話し合い。 →上原小学校より教頭先生、水流先生参加。船浦中学校より教頭先生、新垣先生参加。 ・ 20 日、夏休みの朝のラジオ体操（→ 8 月 30 日）。 ・ 29 日、浦内納涼祭。エイサー、他の披露。
8 月	・ 1 日、沖縄県観光週間。クリーンアップ作戦にて、浦内子供会が日ごろの活動を評価され、表彰される。 ・ 5 日、浦内川クリーンアップ作戦。浦内川観光さんより謝礼をいただく。 ・ 10 日、浦内活性化施設内の掃除。 ・ 24 - 25 日、子ども祭り、ぱいぬ島まつりに参加。
10 月	・ 20 日、秋の清掃日。
12 月	・ クリスマス会。
1 月	・ 3 日、成人式。 ・ 祝賀会。余興に参加。
2 月	・ お別れ会。 ・ 2 日、やまねこマラソンに向けての清掃。
4 月	・ 平成 13 年度決算総会。

6 平成 12 年度 浦内公民館婦人部総会

- 〈と き〉 平成 12 年 3 月 27 日（火） 午後 8 時
- 〈と ころ〉 浦内活性化施設
- 〈議 題〉
- (1) 平成 12 年度活動報告
 - (2) 上原地区婦人会連絡係りの協力金について
 - (3) 平成 12 年度収支決算報告
 - (4) 平成 12 年度会計監査報告
 - (5) 役員改選
 - (6) その他

〈活動報告〉

月	活 動 内 容
4 月	・ 16 日、浦内公民館総会。 ・ 23 日、転入者歓迎グランドゴルフ親睦会。(連合)
5 月	・ 20 日、5 月の集い (婦人部親睦夕食会)。
6 月	・ 4 日、映画「ナビィの恋」チケット販売の協力。(連合婦人) ・ 11 日、竹富町球技大会に参加。ソフトバレーを 5 月 15 日より練習開始。町 (連合) →宮城洋子、池村恵美、西村典子、上里喜美江、古川恵里、入石垣朝美。
7 月	・ 29 日、納涼祭。
9 月	・ 15 日、敬老の日グランドゴルフと交流会。町 (連合) ・ 30 日、デンサ節大会に協力。町 (連合)
12 月	・ 20 日、上原多目的集会施設大掃除。(連合)
1 月	・ 3 日、成人式。(連合) ・ 6 日、公民館大掃除。新年会準備。 ・ 7 日、新年会。 ・ 10 日、西部地区老人クラブ新年ゲートボール大会に協力。(連合婦人)
2 月	・ 10 日、やまねこマラソン大会に協力。町
3 月	・ 27 日、会計監査。・ 27 日、総会。

追悼 玉城功一先生のご逝去を悼む

竹富町史編集委員会 委員長 石垣 久雄

玉城功一先生が2024年8月24日ご逝去されました。行年87歳でした。

先生と私は長年、高等学校の社会科の教師として、教育畑をともに歩んだ先輩・後輩の仲でした。同時に、竹富町史編集室ができた1990年から2019年まで、町史編集委員として、また竹富町史波照間島編の専門部会長として、ともに竹富町史編集事業に従事した仲間でもありました。

私は先生からたくさんのことを学びました。今も私の心を動かしているのは、先生の平和を希求する強い信念です。20世紀の世界大戦、アジア・太平洋戦争、沖縄戦争で起きた、人間の生命が虫けら同様に軽んじられるような戦争社会をつくってはならないと、生涯訴えてこられました。

先生は、八重山商工高校に勤務しているとき、波照間島の戦争マラリアを題材として、「石に刻む『忘勿石』物語」の脚本を書かれました。この演劇は、高等学校教職員組合八重山支部第20回文化祭で、金城利信演出のもと、商工高校教職員約50人が出演し、戦争マラリアの悲劇を演じました。当時、波照間島の校長・識名信昇が疎開地である西表島南風見の岩に「忘勿石 ハテルマ シキナ」の文字を刻んでいる場面が、今も脳裏に浮かんできます。

また先生は、郷里・波照間島の歴史、文化研究にも心血を注ぎ、1993年には波照間島出身者とともに「波照間文化協会」を立ち上げました。会長に就任するや、波照間島に関する資料

の掘り起こし、基礎資料の読み合わせなどを行なってこられました。とりわけ、オランダの民俗学者・コルネリウス＝アウエハントの40年にもわたる調査研究の成果を島人と学習し、それを共有することを考えておられました。

その他、数多くの功績を残されています。

その一つが、沖縄県選択無形民俗文化財の記録『波照間島のムシャーマ』（1982年）です。その記録作成の中心的人物の一人が玉城功一先生でした。

二つ目は、沖縄県教育委員会発行の『沖縄県史 第10巻 沖縄戦記録2』（1974年）です。先生は当時の波照間島の方々から、戦争マラリアの体験・証言をくまなく取材記録し、波照間島の戦争マラリアの実態を明らかにされました。

そして、八重山の戦争は、弾で死ぬということは少なかったが、波照間島では飢えとマラリアで477名の死亡者がでました。その数は波照間島の当時の人口約三割に相当し、沖縄戦最大の死亡率だと、語っておられました。

三つ目は、2018年に発行された『竹富町史 第七巻 波照間島』です。先生は、波照間島編の専門部会長として情熱を燃やし、波照間島の歴史と文化を残し、後世に継承すべく編集作業に取り組んでおられました。

近年、波照間島は「最南端の国境の島」、「砂浜の美しい島」と知られ、観光客にとっても魅力に富む島です。その一方で、歴史をふり返ると、時の権力者によって悲哀の道を歩まされた

島でもある、と口癖のように繰り返し語っておられました。

琉球王国時代は、道切り政策で、有無を言わず、他の島や村に強制移住をさせられました。天皇制が絶対の軍国時代には、マラリアの巣くう南風見の地に疎開を強いられました。そして今、台湾有事ということで、与那国島や石垣島を要塞化し、八重山の住民は九州に非難させる計画が発表されています。

私たちは、日本国憲法の前文に明記されるよう、再び戦争の惨禍が起こることのないように決意した国で暮らしています。玉城先生が「人間の生命が虫けら同様に軽んじられるような戦争社会をつくってはならない」と、熱く語られる姿を思い起こします。

私たちは、先生の憂えたことが二度と繰り返されることがないように、がんばっていく所存です。先生、ありがとうございました。安らかに眠りください。

(『八重山毎日新聞』2024年10月4日)



2010年、波照間島にて。(撮影・提供／石垣佳彦)

坂の下のマホロバ

西前津 松市

波照間島の《ヨーサティ節》は、《桃里節》や《小浜節》等同様土地讃歌だ。総体としての波照間を常套的に褒め称えた後に各村々の本道や道筋の樹木等景観のすがすがしさ、乙女らの美しさを詠っている。

それは「びらちキみちキ」から始まる。そのわけは、その道西端の「びらちキぬうがる」（びらち坂）から西方に見渡せた景観に係るのだろう。

びらちキみちキ かゆてい

うしキくだしキみりば

いにあわぬ なうりキ さていみぐとう

それこそ「国見」の趣である。予祝の性質もあったのだろうが、稔り豊かな景観を前に満足気に佇む為政者の姿を思い浮かべてしまう。往時、波照間島では稲作が行われていて、「びらちキぬうがる」（びらち坂）下から西方にかけて開けた低地一面に水田が広がっていた。「びらちキぬうがる」は結構な勾配と高低差があったので、眼下に「いにあわぬ なうりキ」を一望できたのである。

続いて詠まれる「ながどうみちキ」は、「びらちキぬうがる」下から「ふかぬむら」（フカ村）に向かって延びる。両側に稲田が幾重にも展開する、粟も合わせて波照間随一の穀倉地帯であった。

ながどうみちキ ちゅらさ

しキさぶきぬ ちゅらさ

ふかぬむら みやらび なみちゅらさ

ここに登場する樹木は「しキさぶき」（しキさぶ。ハマゴウ）。複雑に入り組む丈夫な根をもつので水田の畔の補強・強化のために植えられたらしい。《ヨーサティ節》は稲粟の描写が主眼であろうから、それに関連する景観・「しキさぶき」も一等めでたく讃えられたことだろう。

「ありキ村」出自の若者・白保（屋号シキサボイ。シキサブ+ヒ[家]の転）さんが、フカ村の長老・大嶺さんを訪ねたところ、「スサボインドゥ（白保さんが） スサブヌミーガ（ハマゴウの地に） オリヤーシタ（いらっしゃったよ）」と笑顔で迎えてくれたという。「ふかぬむら」（フカ村）外れの大嶺さん宅の南面一帯は、80歳手前の大嶺さんの中学生時分まで水田だったので、ハマゴウの群生は馴染み深い佇まい、いわば原風景だったろう。だからスサブ由来のスサボイの若者が現れたとき、勢いそのような物言いになったに違いない。



ハマゴウ（『竹富町史だより』第51号より）

令和 6 年度受入資料

【受贈資料】

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『南島文化研究所所報』〈第 68 号〉 （沖縄国際大学南島文化研究所、 2024 年）	沖縄国際大学南島文化研究所	沖縄国際大学南島文化研究所	4/1
『南島文化』〈第 46 号〉（沖縄国 際大学南島文化研究所、2024 年 3 月）	沖縄国際大学南島文化研究所	沖縄国際大学南島文化研究所	4/1
『奄美大島調査報告書』〈地域研 究シリーズ No.48〉（沖縄国際大 学南島文化研究所、2024 年 3 月）	沖縄国際大学南島文化研究所	沖縄国際大学南島文化研究所	4/1
『在来作物を受け継ぐ人々 種子 は万人のもの』（農文協、2013 年）	増田昭子	砂川哲雄	4/2
『雑穀の社会史』（吉川弘文館、 2001 年）	増田昭子	砂川哲雄	4/2
『詩集 島ーパイパティローマ ー』（あすら舎、2017 年）	佐々木熏	砂川哲雄	4/2
『雑穀 畑作農耕論の地平』（青 木書店、2003 年）	木村重光（編）	砂川哲雄	4/2
『琉球王国の外交文書ーよみがえ る『歴代宝案』 『歴代宝案』訳注本全 15 冊刊行 記念シンポジウム報告集』〈歴代 宝案編集参考資料 24〉（沖縄県 教育庁文化財課史料編集班、 2023 年 11 月）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編 集班	4/5
『沖縄史料編集紀要』〈第 47 号〉 （沖縄県教育庁文化財課史料編集 班、2024 年 3 月）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編 集班	4/5
『沖縄県史だより』〈第 33 号〉（沖 縄県教育庁文化財課史料編集班、 2024 年 3 月）	沖縄県教育庁文化財課史料編集班	沖縄県教育庁文化財課史料編 集班	4/5
『法政大学沖縄文化研究所所報』 〈第 93 号〉（法政大学沖縄文化研 究所、2024 年 3 月）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	4/5
『竹富島わらべ歌等記録調査報告 書 Vol2』（竹富町教育委員会社 会文化課、2024 年 4 月）	NPO たきどぅん	竹富町教育委員会社会文化課	4/12
『対馬の昆虫 陸橋の島の生物多 様性』開館 1 周年記念特別展（対 馬博物館、2023 年 4 月）	対馬博物館	対馬博物館	4/16
『平常展示図録』（対馬博物館、 2022 年 4 月）	対馬博物館	対馬博物館	4/16

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『対馬博物館』対馬博物館要覧（対馬博物館、発行年不明）	対馬博物館	対馬博物館	4/16
『ツウな島対馬ガイドブック』（対馬市、2023年11月）	イングラ HIQU DESIGN	対馬博物館	4/16
『ツシマガイドブック』（対馬市、2024年3月）	対馬観光物産協会	対馬博物館	4/16
『発掘された日本列島』（共同通信社、2023年8月）	文化庁	対馬博物館	4/16
『対馬の外交Ⅰ 以酊庵』対馬博物館開館記念特別展（対馬博物館、2022年4月）	対馬博物館	対馬博物館	4/16
『対馬の外交Ⅱ 朝鮮通信使 江戸登城・淀川上り・文化交流』ユネスコ「世界の記録」登録5周年記念特別展（対馬博物館、2022年10月）	対馬博物館	対馬博物館	4/16
『沖縄文化研究』〈51〉（法政大学沖縄文化研究所、2024年3月）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	4/22
『琉球の方言』〈47号〉（法政大学沖縄文化研究所、2024年3月）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	4/22
『竹富町婦人連合会 結成50周年記念誌』（竹富町婦人連合会、2024年3月）	竹富町婦人連合会結成50周年記念誌編集委員会	竹富町婦人連合会	5/9
『琉球文学大系編集刊行事務局報風』〈第10号〉（名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学体系」編集刊行事務局、2024年4月）	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学体系」編集刊行事務局	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学体系」編集刊行事務局	5/20
『安慶名良信物語 豚がつかないだハवाईと沖縄』（うるま市教育委員会、2024年3月）	喜納常稀、うるま市教育委員会	うるま市教育委員会	5/27
『和泊町の歩み』（和泊町教育委員会、2024年5月）	和泊町教育委員会	和泊町	5/31
『資料館だより』〈No.73〉（ひめゆり平和祈念資料館、2024年5月）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	5/31
『宮古島市史資料9 イキマインシャの記憶 ～池間漁師の知識と知恵～』（宮古島市教育委員会、2024年5月）	伊良波進、宮古島市教育委員会生涯学習振興課	宮古島市教育委員会	6/4
『波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立記念式並び合同慰霊祭』（忘勿石之碑修復・波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立期成会、2024年6月）	忘勿石之碑修復・波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立期成会	忘勿石之碑修復・波照間島戦争マラリア犠牲者戦没者慰霊之碑建立期成会	6/18

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『2023 年度 恩納村史編さんだより』〈第 90 号～第 95 号〉（恩納村史編さん係、2024 年 3 月）	恩納村史編さん係	恩納村史編さん係	7/1
『令和 5 年度 沖縄語（しまくとぅば）保存継承事業報告書』（読谷村教育委員会文化振興課村史編集室、2024（令和 6）年 3 月）	読谷村教育委員会 文化振興課	読谷村教育委員会文化振興課 村史編集室	7/1
『第 36 回読谷村平和創造展「八巻太一からみる読谷村」展示資料集』（読谷村教育委員会文化振興課村史編集室、2024（令和 6）年 3 月）	読谷村教育委員会 文化振興課	読谷村教育委員会文化振興課 村史編集室	7/1
『沖縄県地域誌協議会会誌』〈第 47 号〉（沖縄県地域誌協議会、2024（令和 6）年 6 月）	沖縄県地域誌協議会	沖縄県地域誌協議会	7/1
『感想文集ひめゆり』〈第 35 号〉（ひめゆり平和祈念資料館、2024 年 6 月）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	7/1
『資料館だより』〈No.72〉（ひめゆり平和祈念資料館、2023 年 11 月）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	7/1
『年報』〈第 35 号〉（ひめゆり平和祈念資料館、2024（令和 6）年 6 月）	ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆり平和祈念資料館	7/1
『昭和 16 年の映画「海の民－沖縄島物語」に見る糸満町 第 58 回糸満の歴史と文化研究会』（南山史研究会、2024 年 6 月）	金城善	金城善	7/2
『多良間村ふるさと民俗学習館で展示している「過渡期辞令書」四点は誰のもの 宮古島市総合博物館紀要第 26 号抜刷』（宮古島市総合博物館、2022 年 3 月）	金城善	金城善	7/2
『首里城研究』〈No.19〉（首里城公園友の会、2017 年 3 月）	首里城研究会	金城善	7/2
『首里城研究』〈No.23〉（首里城公園友の会、2017 年 4 月）	首里城研究会	金城善	7/2
『首里城研究』〈No.24〉（首里城公園友の会、2017 年 5 月）	首里城研究会	金城善	7/2
『首里城研究』〈No.26〉（首里城公園友の会、2017 年 6 月）	首里城研究会	金城善	7/2
『首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報〈概要版〉』（創刊号（平成 21 年度号））（海洋博覧会記念公園管理財団、2011 年 3 月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報』〈創刊号（平成21年度号）〉（海洋博覧会記念公園管理財団、2011年3月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『首里城公園に関する調査研究・普及啓発事業年報』〈No.8（平成28年度号）〉（沖縄美ら島財団、2018年3月）	沖縄美ら島財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『首里城のデザイン』（海洋博覧会記念公園管理財団、2011年7月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『琉球王朝の華ー美・技・芸ー』（海洋博覧会記念公園管理財団、2002年10月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』（海洋博覧会記念公園管理財団、2010年3月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『琉球楽器復元調査製作業務報告書（基礎資料編）』（海洋博覧会記念公園管理財団、2009年3月）	海洋博覧会記念公園管理財団	沖縄県地域誌協議会	7/2
『あしびなあー西表、石垣特集ー』（第11号）（沖縄県地域誌協議会、2002年5月）	沖縄県地域誌協議会	沖縄県地域誌協議会	7/2
『あしびなあー石垣市登野城特集号ー』（第16号）（沖縄県地域誌協議会、2005年7月）	沖縄県地域誌協議会	沖縄県地域誌協議会	7/2
『あしびなあー波照間島研修特集号ー』（第19号）（沖縄県地域誌協議会、2008年8月）	沖縄県地域誌協議会	沖縄県地域誌協議会	7/2
『教師のための郷土史講座（講演要旨）』（冲教組教育研究所、1992年11月）	冲教組教育研究所社会科部会	沖縄県地域誌協議会	7/2
『新平和祈念資料館と摩文仁そして「平和の礎」を学ぶ』（冲教組・高教組ブックレット No9）（冲教組・冲教組教育研究所・冲教組沖縄教育文化資料センター、2001年3月）	沖縄教育文化資料センター	沖縄県地域誌協議会	7/2
『沖縄の混血児と母たち』（青い海出版社、1980年7月）	福地曠昭	沖縄県地域誌協議会	7/2
『沖縄県史第12巻 沖縄県関係各省公文書付録』（国書刊行会、1989年）	琉球政府	沖縄県地域誌協議会	7/2
『干立 バシマを語る』（向井進、2016？）	向井進	向井進	7/9

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『尖閣諸島関係新聞記事資料集』（公益財団法人日本国際問題研究所、2024年3月）	國吉まこも監修	公益財団法人日本国際問題研究所	7/29
『村と家の守り神 再考 沖縄の魔除け獅子』（沖縄村落史研究所、2004年8月）	長嶺操	石垣市教育委員会	8/5
『史跡フルスト原遺跡保存活用計画』（石垣市文化財調査報告書第44号）（石垣市教育委員会、2023年5月）	石垣市教育委員会	石垣市教育委員会	8/5
『浮海古墓群 リゾート施設建設に伴う緊急発掘調査報告』（石垣市文化財調査報告書第46号）（石垣市教育委員会、2024年3月）	石垣市教育委員会	石垣市教育委員会	8/5
『5周年記念 沖縄・八重山文化研究会 会報』（1991年～1996年）（沖縄・八重山文化研究会、1996年8月）	沖縄・八重山文化研究会	三木健	8/6
『10周年記念 沖縄・八重山文化研究会 会報』（1996年～2001年）（沖縄・八重山文化研究会、2001年9月）	沖縄・八重山文化研究会	三木健	8/6
『15周年記念 沖縄・八重山文化研究会 会報』（2001年～2006年）（沖縄・八重山文化研究会、2007年8月）	沖縄・八重山文化研究会	三木健	8/6
『20周年記念 沖縄・八重山文化研究会 会報』（2006年～2011年）（沖縄・八重山文化研究会、2011年10月）	沖縄・八重山文化研究会	三木健	8/6
『島に生きた旧石器人・沖縄の洞穴遺跡と人骨化石』（シリーズ「遺跡を学ぶ」104）（新泉社、2015年10月）	山崎真治	通事孝作	8/9
『青い海 復刻版 別冊』（三人社、2024年5月）	高江洲義寛ほか8名	三木健	8/20
『海際をつぶやき ～石垣島の変化に富んだ海岸線を42回歩く～』（南山舎、2024年7月）	西前津松市	西前津松市	8/21
『還暦 創立60周年記念誌』（竹富老人クラブ松竹会、2024年8月）	記念誌編集委員会	野原吉雄（同会会長）	9/6
『法政大学沖縄文化研究所所報』（第94号）（法政大学沖縄文化研究所、2024年9月）	法政大学沖縄文化研究所	法政大学沖縄文化研究所	9/11

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『アール・ヌーヴォーのガラス』（九州国立博物館、2023年4月）	九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『うるわしき祈りの美』（九州国立博物館、2023年9月）	九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『特別展 古代メキシコ 展覧会図録』（NHK ほか、2023年6月）	杉山三郎ほか監修	九州国立博物館	9/24
『憧れの東洋陶磁』（東京美術、2023年7月）	大阪市立東洋陶磁美術館、九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『特別展 生誕270年 永沢芦雪』（九州国立博物館、2024年2月）	岡田秀之ほか編	九州国立博物館	9/24
『日本刀の美 北崎徹郎コレクション』（九州国立博物館、2024年1月）	九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『平成28-29年度 九州国立博物館 文化財修理報告』（九州国立博物館、2024年3月）	九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『東風西声 第19号 九州国立博物館紀要』（九州国立博物館、2024年3月）	九州国立博物館	九州国立博物館	9/24
『登録有形文化財（建造物）なごみの塔修理報告書』（竹富町、2024年9月）	村田信夫	竹富町教育委員会社会文化課	9/27
『琉球大学民俗研究クラブ調査報告書DVD』（琉球大学民俗研究クラブ、2024年11月）	琉球大学民俗研究クラブ	琉球大学民俗研究クラブOB会	11/22
『沖縄 今この時』（あゆみ出版社、1972年6月）	屋良朝苗、沖縄革新共闘会議（編）	沖縄県地域誌協議会	11/22
『沖縄の母親たち』（合同出版、1968年6月）	日本教職員組合・沖縄教職員会（共著）	沖縄県地域誌協議会	11/22
『珊瑚の島燃えて』（沖縄県学校用品、1993年11月）	「語り継ぐ沖縄戦 珊瑚の島燃えて」編集委員会	沖縄県地域誌協議会	11/22
『令和6年度琉球大学附属図書館企画展 琉大資料がつなぐあやはしうるまの今昔』（琉球大学附属図書館、2024年10月）	琉球大学附属図書館	琉球大学附属図書館	11/22
『とみぐすく写真アーカイブ 総集編第1号 近代の豊見城 沖縄戦・戦後の風景』（豊見城市教育委員会、2024年3月）	豊見城市教育委員会教育部文化課、（株）Nansei	豊見城市教育委員会	11/22
『とみぐすくデジタルアーカイブガイド Vol.1』（豊見城市教育委員会文化課、2023年10月）	豊見城市教育委員会教育部文化課	豊見城市教育委員会	11/22

書誌（書名、発行所、発行年）	編著者・編集	寄贈者	受入日
『ひめゆりの心 八重山の思い』（南山舎、2024年11月）	川平カツ	慶田盛みき子	11/22
CD『在沖石垣市郷友会会歌 ばがけーら』（在沖石垣市郷友会、2001年）	作詞：三木健 作曲：宮城衛 唄1：ミヤギマモル 唄2：那良伊千鳥	三木健	12/11
『琉球文学大系編集刊行事務局報風』（第11号）（名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局、2024年12月）	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局	名桜大学環太平洋地域文化研究所「琉球文学大系」編集刊行事務局	12/17
『沖縄・八重山 50年史』（不二出版、2024年）	三木健	不二出版	2025 1/9
『さざなみ』（私家版、2022年）	登野原武	登野原五月	1/10
『緑の牢獄』（五月書房新社、2021年）	黄インイク	黄インイク	2/3
『石垣市の文化財』（石垣市教育委員会、2014年）	石垣市教育委員会	石垣市教育委員会	2/27

【購入資料】

書名	編著者	出版者	出版年
『西表島のいきもの図鑑 1000種』	堀井大輝	メイツ出版	2023年12月
『琉球文学大系（12）琉歌 中』	前城淳子、石川恵吉校注	ゆまに書房	2024年1月
『琉球文学大系（15）組踊 下』	波照間永吉ほか校注	ゆまに書房	2024年3月
『琉球文学大系（24）琉球和文学』	玉那覇峻ほか校注	ゆまに書房	2024年7月
『琉球文学大系（35）琉球民俗関係資料4』	山里純一ほか校注	ゆまに書房	2023年12月
『八重山の芸能探訪』	當山善堂	琉球新報社	2018年1月
『黒島事典』	當山善堂	東洋企画	2024年11月
『ジーファアの記憶』	今村治華	東洋企画	2022年4月
『沖縄・奄美の島々を彩る歌と踊り』	久万田晋	ボーダーインク	2024年1月
『地層と化石が語る琉球列島三億年史』	神谷厚昭	ボーダーインク	2015年4月
『八重山近代民衆史』	三木健	三一書房	1980年4月
『石垣市史 各論編 民俗（下）』	石垣市史編集課	石垣市	2007年3月
『石垣市史叢書 13 八重山島年来記』	石垣市史編集課	石垣市	1999年2月
『石垣市史叢書 16 北木山風水記』	石垣市史編集課	石垣市	2008年1月
『石垣市史叢書 25 参遣状 5』	石垣市史編集課	石垣市	2021年3月
『八重山を学ぶ 増補改定』	「八重山を学ぶ」刊行委員会	沖縄時事出版	2024年11月

第 48 回竹富町史編集委員会報告

第 48 回竹富町史編集委員会が、令和 6 年 12 月 6 日午後 1 時半から午後 4 時まで、「全員会議室」（竹富町役場 4 階）で開催された。

本会議の出欠確認が行われた。

出席者は、編集委員長・石垣久雄氏、副委員長・里井洋一氏、新本光孝氏、西表隆夫氏、上江洲儀正氏、大浜修氏、通事孝作氏、花城正美氏、三木健氏、吉川英治氏（以上、編集委員 10 人）、当局から竹富町教育長・佐事安弘氏、教育委員会社会文化課課長・西波照間優氏、担当事務局から竹富町史編集係・飯田泰彦、米盛恭子の合計 14 人（欠席者は編集委員・池田克史氏、大城肇氏、島村賢正氏、那根真氏）。

冒頭に、今年度に鬼籍に入られた登野原武氏、玉城功一氏に黙祷を捧げた。また、編集委員長・石垣久雄氏が、11 月「文化財保護の功績」により、文化庁から「地域文化功労者」として表彰されたことを、出席者一同が拍手で祝意を表した。

竹富町教育長・佐事安弘氏は、委員会参加の御礼を述べたあと、『自然編ビジュアル版』の取り組みと、第 45 回編集委員会において専門部会が承認された郷友会編の意義に触れ、「将来の竹富町にとって、町史編集事業は先人の足跡や、自然と調和した人々の暮らしを伝える重要なカギになってくると思われます」と結んだ。また、編集委員長・石垣久雄氏は、「今週は登野原武先生、その前には玉城功一先生、西里喜行先生と町史編集事業に携わってこられた方々

が亡くなられました。委員の皆さまにおかれましては、体調管理にはくれぐれも気をつけ、頑張っていきましょう。これから西表島編、黒島編、自然編、郷友会編の編纂を進めるにあたり、いよいよ執筆の大事な時期となってきます。また、町史編集事業を次の世代にどのようにして引き継いで発展させていくかということも大きな課題です。本日、審議・決議した案件がスムーズに成就できるよう、鋭意取り組んでいきましょう」と挨拶した。

続いて、事務局より 2024 年度の竹富町史編集係の業務経過報告があった（70 頁参照）。

そして、次に挙げる議題にしたがって、第 48 回竹富町史編集委員会が慎重審議された。

- (1)『竹富町史 第八巻 西表島』の進捗状況について（報告）
- (2)『竹富町史 第四巻 黒島』の進捗状況について（報告）
- (3)『自然編 ビジュアル版』の進捗状況（報告）
- (4)『郷友会編』について（報告）
- (5) その他
 - ・発刊計画について
 - ・町史発刊書の在庫について
 - ・その他

議題（1）『竹富町史 第八巻 西表島』の進捗状況について〈事務局・米盛恭子 報告〉

2024 年 8 月 9 日開催の専門部会以降、部会

を開催できなかったので、事務局から進捗状況について報告した。

現在、南山舎と校正原稿のチェックを行い、執筆者へ原稿の返送を行うとともに、写真や図、その他の使用許可申請を行っているところである。12月4日、池田克史氏の原稿「西表島の信仰、村落組織について」を受理した。

『西表島編』〈上巻〉の原稿は出揃っているので、今年度中に発刊予定。〈下巻〉については、前回の編集委員会で「西部の水と電気」（池田克史氏執筆）など、新たに追加した項目もあり、原稿が整い次第版下制作工程に入る計画である。編集委員会終了後、執筆者は〈上巻〉の版下原稿の確認作業を行った。今後、年明けには印刷製本の手続きを進めることができるようにする必要がある。

大浜修委員より、「池田克史氏と連絡を取りあって、未提出原稿の提出ができるように頑張りたい。終章についても2人でもう少し原稿を整えていきたい」と決意が述べられ、編集委員長・石垣久雄からは、「今年中に原稿を揃えるということなので、編集委員会からも専門部会の皆さんを激励しましょう」と、励ましの言葉があった。

議題（2）『竹富町史 第四巻 黒島』の進捗状況について〈部会長・那根真 報告 / 事務局・飯田泰彦 代読〉

那根真部会長欠席により、事務局から報告があった。黒島編進捗状況表をみると、約7割の原稿が提出済である。そのうちゲラの形にできるものもいくつかある。

例えば、新本光孝氏の原稿「黒島の自然」、得能壽美氏の第3章「歴史」の一連の原稿、第14章「黒島に関する資料」（第47回委員会提示資料）などである。これらについても、さらに精度を高め、予定通り再来年度の発刊を目指している。

現在、第3章「歴史」の全体像柱は見えてきているが、「戦後の歩み」の原稿がまとまっていない。この部分については、黒島に関する戦後史年表を専門部会のなかで共有し、歴史的な流れや大きな枠組みとしてまとまる事柄から順次原稿化していくことを申し合わせている。

これまで方言表記が課題の一つであったが、待望の當山善堂氏の大著『黒島事典』の刊行により、表記の基準ができ編集作業を大きく前進させることになると思う。西表隆夫委員より、「『黒島事典』には、言語だけでなく、玉代勢泰起氏が描いた民具のイラストや、その他参考になる事項も沢山盛り込まれているので、全分野にわたって活用し、編集を進めていきたい」との発言もあった。

また、発刊計画が遅れていることにより、コロナ禍を経た後の観光の状況や、西表島が世界遺産に含まれたことによる影響も視野に入れた記述も可能になった側面もある、という発刊遅延についての前向きな解釈も聞かれた。

事務局では、写真の交渉や挿入するコラムの交渉も、一部分ではあるが着手し始めた。今年度来年度頑張って、再来年度発刊できるようにしたい。

議題（3）『自然編 ビジュアル版』の進捗状況について〈委員・新本光孝 報告〉

新本光孝委員より報告。詳細を省き、ダイジェストという形で報告があった。

自然編は、「ビジュアル版」という性格から、写真の収集、掲載依頼など、非常に神経を使っているが、多くの了解を得ることもでき安心している。

第1章「竹富町の島々」は、県の教育委員会とやり取りしてかなり進んでいる。

第2章「竹富町のシンボル」は全て揃った。

第3章「天文と星空」は、宮地竹史初代石垣島天文台長とミーティングを重ねている。星空

は新しい自然資源・観光資源になっており、自然編のなかにしっかり位置付けていきたい。「台風」について、国土交通省石垣島天文台、気象台にご協力いただき資料をいただいている。「石西礁湖」については出そろっている。

第6章「西表島の自然」は、南部、南西部、北西部、北部の風景・景勝地の原稿をお願いしており、南部と南西部は大浜さんの方で間もなくできあがると思う。西部の方は、池田克史さんをお願いしている。「河川」、「鉱石とスズ石」も資料は整っている。

「生き物」は「ヤマネコ」や「イノシシ」など、環境省のお力添えをいただいた。「河川」「海の生き物」は、関係者に原稿の執筆依頼をしているところである。

「サンゴ」について、「崎山のサンゴ」は世界最大級のアザミサンゴであり、これは特記したものである。幸い西平守孝氏の撮影した写真があり、活用させてほしいとお願いしたところ、快く提供いただき整理を進めている。

「島周辺のサンゴ礁」については、最近刊行された『沖縄のサンゴ礁』（沖縄県文化環境部自然保護課）に収載されている素晴らしいサンゴの写真がある。これは西表島周辺6ヵ所のサンゴである。これも県の担当者と交渉中である。「サンゴの白化現象」も既に黒島研究所の方をお願いしてある。

第7章「島々の自然」は、竹富町史島じま編シリーズの既刊書をもとに原稿化を進めていきたい。新城島と鳩間島が残っているが、編集係と連携を取りながら、今後どうしたらいいのか、委員の先生方とも相談をしながら進めていきたい。

議題（4）『郷友会編』について

〈部会長・狩俣恵一、事務局・飯田 報告〉

第45回竹富町史編集委員会において、専門部会の発足が承認され、専門部会は各島から専

門員を推薦して構成されることになった。2024年8月に専門部会を立ち上げ、第47回編集委員会で委員委嘱の辞令交付が行われた。専門部会委員は次の9名（括弧内は担当地域）。

狩俣 恵一（委員長、竹富島担当）／花城 正美（小浜島担当）／那根 真（黒島担当）／大浜 修（新城島、西表島東部）／島村 賢正（波照間島担当）／吉川 英治（鳩間島担当）／池田 克史（西表島西部担当）／大城 辰彦（西表島東部、在沖郷友会担当）／有田 静人（竹富島、在京郷友会担当）。

郷友会の成立や活動内容もさまざま、各地の事情を背景とした特性がみられ、一律に語れるものではない。

例えば、八重山に由来する郷友会は伝統文化、特に祭りの継承に意識的である、また宮古地域の郷友会では経済や選挙での団結に力を発揮する面がみられることなどが挙げられる。

八重山に由来する郷友会のなかでも、在石垣・在沖縄・在東京によって、性格や意識のあり方に違いがみられる。また、西表島の郷友会は集合離散しながら継続していることにも注視していきたい。そのため各地の事情に応じて掬い上げていく方法を考えていかなければならない。

竹富町が刊行する『郷友会編』の意義を問い直し、近現代史を視野に入れながら、親島・郷友会両者の視点を生かした構成にしたい。そのとき伝統的な集落単位の意識や、その枠を越えた意識、開拓集落などについても検討する必要がある。

『郷友会編』について、400～450頁の本を想定し、次のような目次案が提示された。

郷友会編目次案

序章 はじめに	
郷友会とは何か	「異郷における公民館活動」（有田、2024 年）。大雑把な概念規定。 親島としての島じま。親島に対するリスペクト。親島への援助の変遷。 竹富町編を編むにあたり、「竹富町のアイデンティティは」（西里）
現状の把握	概略的。大雑把な郷友会の歴史。島を離れた人々の諸相。 →進学・就職・結婚…。近現代以降。 構成員の状況。2、3 世の意識。個々濃淡あり。内面の問題にも触れる。
問題提起	未来志向で。これからの竹富町と島じま。
第 1 章 島じまの集落と近代 →執筆は編集委員を中心に。『近代編』の資料を積極的に活用。	
第 1 節 集落の変遷	集落を中心に島じまの歴史を考える。
第 2 節 集落意識と近代	原勝負、運動会などにみる集落対抗意識。寄留民の存在。 集落意識が近代の政治や祭りに影響したことなど。
第 3 節 学校と集落の近代化	学校の設立と集落意識。同期会と集落意識の緩和。 学校行事と集落の関わり。
第 2 章 島じまの戦後 →執筆は編集委員を中心に。	
第 1 節 竹富町の島じまと石垣島	海上交通の件。なぜ竹富村の名称か。 竹富⇒小浜（戦時中）⇒石垣⇒西表の役場移転。
第 2 節 開拓村の歩み	大富、大原、豊原、住吉、白浜、由布…。 それぞれ 80 年の歴史を歩む。 伝統的集落が持つ農暦とは別の年中サイクル有り。 開拓周年行事がメイン。
第 3 節 島じまと米軍、及び民政府	島じまによって濃淡がある。 米軍の支援記事も多い。
第 4 節 島じまの組織・団体	公民館、青年会・婦人会・老人会、模合、学校関係、任意団体、支援団体…。
第 3 章 座談会 石垣・沖縄・本土の郷友会	
第 1 節 在石垣座談会	自由に語ってもらう。関連記事を挿入
第 2 節 在沖縄座談会	自由に語ってもらう。関連記事を挿入
第 3 節 在本土座談会（東京・関西）	自由に語ってもらう。関連記事を挿入
第 4 節 郷友連合会とシマ郷友会	自由に語ってもらう。関連記事を挿入
第 4 章 島じまの特性と郷友会・母村 →執筆は編集委員を中心に。	
第 1 節 竹富島	「うつぐみの島 竹富島」。在東京竹富郷友会 100 周年。
第 2 節 小浜島	「かふぬ島 小浜」。
第 3 節 黒島	
第 4 節 新城島	「パナリ焼の里とザンの島」。独自の事情。
第 5 節 鳩間島	「神の島 夢の通り路 鳩間島」

第6節 波照間島	「すむずれ」の島 波照間島
第7節 西表島	「琉球弧の宝庫・西表島」、「開拓村と母村」
第5章 島じまの祭りや郷友会 島からの視点・郷友会からの視点	
第1節 竹富島	
第2節 小浜島の祭りや郷友会	
第3節 黒島の祭りや郷友会	
第4節 新城島の祭りや郷友会	
第5節 鳩間島の祭りや郷友会	
第6節 波照間島の祭りや郷友会	
第7節 西表島の祭りや郷友会	
第8節 開拓村の行事	
終章 郷友会の過去・現在・未来 回顧と展望	
〈資料〉地元紙にみる竹富町郷友会記事・年表	

議題（5）その他〈事務局 飯田・米盛 報告〉

事務局から、「発刊計画について」「町史発刊書の在庫について」「『竹富町史だより』〈第55号〉目次及び進捗状況」「小浜島に関する資料」「映画会の開催について－「Cinema at Sea(沖縄環太平洋国際映画祭)、Cinema at Sea(巡回映画祭 in 沖縄・八重山)、ドキュメンタリー映像「アジアはひとつ」竹富町上映会－について」などの報告があった。

とりわけ、令和6年11月現在の在庫状況について、『竹富島編』『小浜島編』の在庫がなく、問い合わせや増刷を要望する声が多数寄せられているが、これらに応えるための方法も模索する必要がある。

町史編集委員会の1コマ ―質疑応答から―

▷三木健 門外漢の私がちょっと言うのもなんですけど、西表島の南側にある仲の御神島について、そこは海鳥の楽園といわれるぐらい、海鳥の繁殖地と聞いている。台湾航路の船で、側を通ったことがあるが、たくさんの海鳥が乱舞していて、すごいなと思った。目次で、そういう島のこと紹介されるのか、あるいは紹介したら荒らされるから、しない方がいいのかなど、そういう政策的判断も含めてどんなふう考えるのかお聞きしたい。

▷新本光孝 竹富町は、有人島の他にもいろいろ小さな島々がある。なかでも有名なのは今おっしゃった仲の神島。これも当初から、ここは入れた方がいいんじゃないかというお話があった。しかしこれは上陸なんかできないし、調査するにしても普通の人はなかなか入れない。そこで、

どうするかと考えた場合、34 ページに「天然記念物」というのがあって、その中で、仲の神島という項目を入れ、そこに写真を掲載しようかと思っている。そういう状況で、仲の神島の話をする、誰も調査もできませんとそういう状況だった。国の天然記念物に指定されているので、その項目のなかに入れてある。

▷吉川英治 質問ではないが、レジュメ 34 ページの「特定植物群落」で、第 4 節の鳩間島については、今後、新本先生からご指導を受けながら頑張りたいと思う。

▷新本光孝 「特定植物群落」は、環境省の指定を受けたものであるが、竹富町では 1 カ所もないと思う。何度も調べてみたが（指定されて）ないと思う。大変なのは新城島が、相当数抜けているので今後調べて報告することにする。

▷大浜修 新城島では、「特定植物群落」はないと思うのでこれで良いと思う。鳩間島では鳩間中森のクバが県の文化財などに指定受けていないか？

▷飯田泰彦 文化財ではあると思うが、特定植物群落かどうか分からない。

▷西波照間優 海岸沿いのミズガンピとかは？

▷大浜修 波照間島のハマシタンなどはどうだろう。

▷新本光孝 ここでは、すべて国の機関である環境省の指定を受けたものだけを拾い上げて載せている。国、県、市町村をもう一度チェックする。

▷狩俣恵一 鳩間中森のクバについて、《鳩間節》でも謡われ有名だが、喜舎場永珣先生の本に載っていたことだが、昔クバで帽子やなんかを作るため、中森のクバを全部切ってしまったというようなことが書かれていたと思う。そのあたりのことも書いても良いのではないか。

▷新本光孝 また鳩間島には、アイアシという

植物があった。今回鳩間島に行って調べてみたところ、全部ヤギが食べてしまい何もなかった。残念！

▷吉川英治 表の中で新城島がない。これは説明を聞くまで、記入漏れかと思っていたが、今の説明で新城島と鳩間島には特定植物がないということを理解した。次回表記する場合、「鳩間島、新城島には特定植物はない」と書いてもらえると、他の人が見ても記入漏れではないとわかるので、そのようにしていただけるとありがたい。

▷新本光孝 本文の中では、「特定植物、鳩間島、北海岸、アイアシ、絶滅のため無し、現在は消滅している」という表記をするので、わかると思う。



令和 6 年度業務報告

2024 年

- 04/01 大田将之配属。委員委嘱交付（編集委員・郷友会専門委員）。
- 04/03 台湾花蓮市沖を震源とする地震による津波警報。
- 04/13 斜里交流写真展（黒島伝統芸能館）。『八重山毎日新聞』紙上にて「斜里町・竹富町の絆リレー・エッセイ」始まる。第 1 回は、今井郁子「絆」。
- 04/15 大城一文氏原稿「『白浜歴史年表』の作成にあたって」受理。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 04/16 斜里町・竹富町の絆リレーエッセイ第 2 回、三枝大悟「YOUは何しに竹富へ？一絆に助けられてー」掲載。→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 04/18 斜里町・竹富町の絆リレーエッセイ第 3 回、白井平「3000 キロの海をつなぐ、生物と絆」掲載。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 04/20 斜里町交流写真展（小浜公民館）。
- 04/23 斜里町・竹富町の絆リレーエッセイ第 4 回、村田良介「友だちの絆」。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 04/26 斜里町交流写真展（波照間農業集落センター）。
- 04/30 大城肇氏原稿「鳩間公民館の起案資料」受理。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 05/02 斜里町交流写真展（離島総合センター）。
- 05/07 斜里町交流写真展（竹富町庁舎）→ 5/10
- 05/17 空飛ぶ図書館 in 鳩間島（飯田）→ 5/18
- 05/18 斜里町交流写真展（鳩間コミュニティーセンター）
- 05/20 知床博物館に斜里写真展写真返却。
- 06/01 斜里町交流写真展（斜里町ゆめホール知床）→ 6/16
- 06/03 小浜島資料・板証文寄託受付（花城正美氏より）。
- 06/14 石原絹子氏原稿「諸見里秀思を訪ねて」受理。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 06/16 竹富町球技大会（飯田、米盛、スタッフとして）。
- 06/20 空飛ぶ図書館 in 大原、黒島（米盛）
- 06/22 デンサ節大会（わいわいホール、町史係 3 人スタッフとして）。
- 06/24 石垣久雄氏原稿「『竹富町史だより』〈第 54 号〉発刊にあたって」受理。
→『竹富町史だより』〈第 54 号〉に収録。
- 06/27 出張（飯田・米盛→ 29）。

- 06/28 沖縄県地域史協議会総会・研修（読谷）。飯田・米盛参加。
→ 29 日 飯田、沖縄県立図書館。米盛、那覇市歴史博物館。
- 06/28 「竹富町史」、『沖縄県地域史協議会会誌』〈第 47 号〉に掲載。
- 08/01 『竹富町史だより』〈第 54 号〉刊行。
- 08/09 西表島編専門部会開催、郷友会編専門部会開催、編集委員会開催。
- 08/22 飯田泰彦「誘い 八重山民俗舞踊保存会結成 50 周年記念講演会およびトークセッション」(『八重山毎日新聞』2024 年 8 月 22 日に掲載)
- 09/23 黒島体力測定（飯田、スタッフとして）
- 09/27 豊見山和行氏、小浜島板証文調査（→ 28）。
- 10/04 石垣久雄「玉城功一先生のご逝去を悼む」『八重山毎日新聞』2024 年 10 月 4 日掲載。
- 10/09 崎原恒新民俗調査ノート（八重山関連 25 冊）提供を受ける。
- 10/13 新盛家住宅屋根葺見学（→ 14、飯田）
- 10/19 竹富町スマムニ大会（黒島、飯田スタッフとして）
- 10/26 衆議院議員選挙（米盛、選挙事務として）
- 11/11 沖縄県市町村共済組合会議員選挙出席（自治会館、米盛）
- 11/22 沖縄県地域史協議会研修（八重瀬町）。米盛参加。
- 11/28 沖縄県市町村共済組合会理事選挙出席（自治会館、米盛）。
- 12/03 飯田泰彦「『稲が種子アヨー』と『風』」（名桜大学「琉球文学大系」編集刊行事務局報『風』〈第 11 号〉掲載）
- 12/06 第 48 回竹富町史編集委員会開催。
- 12/13 映画「大海原のソングライン」上映会。於・竹富町離島総合センター。米盛・飯田〈スタッフ〉。
- 12/20 映画「アジアはひとつ」上映会。於・中野わいわいホール。米盛・大田〈スタッフ〉。

2025 年

- 02/08 やまねこマラソンのスタッフ。



4/3 津波警報発表による避難（庁舎屋上）



6/3 小浜島板証文寄託



10/13 新盛家住宅屋根葺見学（西表島祖納）



11/22 地域史協議会研修（八重瀬町）

〈公文書関係〉

- 05/01 竹教委社文 第 98 号 西表島「米軍演習の記念碑」写真の使用・転載許可。
- 05/28 竹教委社文 第 193 号 『竹富町史 第六巻 鳩間島』より写真 2 点及び町史所蔵写真 2 点の使用・転載許可。
- 05/28 竹教委社文 第 194 号 『竹富町史 別巻 3 ぱいぬしまじま』掲載写真及び町史所蔵写真の使用・転載許可。
- 06/05 ～ 『西表島』掲載許可申請。※西表島編専門部会経過報告書参照
- 06/26 竹教委社文 第 290 号 第 20 回西表島編専門部会の開催について。
- 06/26 竹教委社文 第 291 号 里井洋一委員の派遣依頼について。
- 06/26 竹教委社文 第 292 号 第 47 回町史編集委員会の開催について。
- 07/10 竹教委社文 第 333 号 第 1 回郷友会編専門部会の開催について。
- 07/11 竹教委社文 第 336 号 『竹富町史だより』50 号掲載の倉橋正氏写真（竹富島なごみの塔 2 点）の転載許可。
- 07/12 竹教委社文 第 363 号 『竹富町史だより』30 号掲載の三木健「『万骨』の歴史顕彰を－西表・宇多良炭鉱跡の『近代化産業群』認定に思う」の転載許可。
- 07/25 竹教委社文 第 378 号 「波照間小学校沿革史」『竹富町史 第十巻 資料編 近代 5 波照間島近代資料集』より、転載許可。
- 10/04 竹教委社文 第 558 号 「Cinema at Sea－沖縄環太平洋国際フィルムフェスティバル」開催に伴う後援の承諾。
- 10/29 竹教委社文 第 623 号 「Cinema at Sea－沖縄環太平洋国際映画祭」へ名称変更に伴う後援承諾の再発行。
- 11/06 竹教委社文 第 641 号 第 48 回町史編集委員会の開催について。
- 11/08 竹教委社文 第 650 号 里井洋一委員の派遣依頼について。
- 12/02 竹教委社文 第 714 号 「Cinema at Sea－沖縄環太平洋国際映画祭」開催周知。

ドキュメンタリー映像 「アジアはひとつ」竹富町上映会について

企画名 ドキュメンタリー映像「アジアはひとつ」
(2023 年版日本語字幕付き) 竹富町上映会

開催趣旨 1969 年～1972 年、沖縄の日本復帰前後に NDU (日本ドキュメンタリストユニオン) は沖縄から島伝いに台湾に宜蘭縣南澳郷のタイヤル族の村に到り、ドキュメンタリー映像「アジアはひとつ」(1973 年 /96 分 /16 mm) を制作しました。

昨年 (2023 年) 12 月、南風原文化センターにおいて、日本語字幕を一部に入れた特別版 (2023 年度製作) が製作され、当時の沖縄や、過去に日本の植民地であった台湾・朝鮮の人々の暮らしや状況などが上映されました。

映像には、かつて西表炭坑で働いていた日本人炭鉱夫や台湾人労働者の証言なども収録されており、興味深い内容です。これまでの歴史を踏まえたうえで、隣島である台湾への友好意識を深めると共に、将来的に竹富町と台湾 (成功鎮) との姉妹都市締結を見据え、台湾への関心や理解を深めることを目的として上映会を開催します。

日時 2024 年 12 月 20 日 (金) 19 時～21 時



会場 中野わいわいホール

主催 竹富町教育委員会

協力 竹富町、神戸映画資料館、与那国町教育委員会、久部良和子氏、安場淳氏

主管 町史編集係

その他 年表及び写真借用：南風原文化センター、与那国町教育委員会

.....

アンケート

1 年齢・性別

男性 25 女性 29 合計 54

30 代 5 人 (男 4、女 1) 40 代 7 人 (男 1、女 6)

50 代 9 人 (男 2、女 7) 60 代 9 人 (男 4、女 5)

70 代 21 人 (男 12、女 9) 80 代 3 人 (男 2、女 1)

2 映画の内容について、全体的な満足度を教えてください。

[とても満足 3 人、満足 21 人、普通 21 人、不



満 7 人、とても不満 0 人]

3 映画で取り上げられたテーマ（沖縄、台湾など）は理解しやすかったですか？

[とても理解しやすい 0 人、理解しやすい 14 人、普通 15 人、理解しにくい 24 人、全く理解できなかった 0 人]

4 上映後の感想を共有する時間があったら参加したいと思いますか？

[はい 15 人、いいえ 11 人、どちらともいえない 22 人]

5 ご意見・ご感想があれば自由にお書きください。（自由記述）

▷「集団就職の場面はぐっとくるものがあった。今ではありえない時代があり、この時代があつての今の西表（八重山）があるのですね！」（40 代女性）

▷「若い人には何がなんだか分からない部分が多くて眠たかったが、当時の芸能の様子や釣りといった、見応えある部分もあった。」（30 代男性）

▷「藤原茂おじいちゃんの若かりし頃を見れうれしかったです」（60 代女性）

▷「那覇の風景 車に復帰前の沖縄を強く感じた。」

▷美原で 20 年前に会ったオジー（台湾からの移住者）のしゃべり方に似ていてなつかしく思う場面が多くあった。」（60 代男性）

▷「貴重な映像が見られて興味深かったです。おじいおばあから聞いていた話を実際に映像として見られたのが本当に良かった。関東大震災の朝鮮人虐殺の時に沖縄の人も殺されたということは知らなかった。」（40 代女性）

〈会場の声〉

▷炭鉱の写真展示があったと思った。

▷カンテラなど、当時使用していた道具などの展示があると良かった。町で収集した方が良い。

▷映像に残されている「藤原茂」さんのお孫さんが来場していて、「父（茂の息子）が鍛冶屋をしていたのでカンテラなど持っている。町に寄贈できると思う。祖父の姿や声が聞けて良かった。」と話していた。

▷中野（上映会をした会場のある集落）には炭坑があったので、上半身裸で外を歩く炭坑夫などがいて怖かった（80 代女性）。

▷中野で、「山神祭（やまがみさい）」をしていたことを覚えている。相撲大会などもしていた。大人数が暮らす集落だった。

▷中野にはパイン工場があり、台湾から来た女工の方が沢山いた。工場の近くに女工部屋（長屋）があつて、賑わっていた。

▷展示の炭坑跡に「六抗」とあるが、中野でパインを植えていた山を「六坑」と呼んでいて、母親が「六抗に行ってくる」と言っていて、この名前からきているんだなと思った（70 代女性）。



竹富町史編集委員会でしばしば話題となることの一つに、各公民館に所蔵する資料（以下、「公民館資料」とする）がある。そこで、公民館資料をどのように保存・継承・活用すればよいか、という問いが決まって投げかけられる。その問いに応えるべく、『竹富町史だより』では、許される範囲で公民館資料を公表してきた。

例えば、『竹富公民館日誌』の紹介〈抜粋〉「日本復帰後の竹富島一」（第51号）、「〈資料紹介〉大原公民館会務表」（第52-54号）、大城肇「鳩間公民館の起案資料（一部）」（第54号）、大城一文「『白浜歴史年表』の作成について」（第54号）などがそうである。このように『竹富町史だより』の紙面を活用していただくのも課題解決の一策であろう。

『竹富町史だより』〈第55号〉では、仲盛長儀氏の「小浜島の概要」、田代馨氏の「浦内公民館の活動—学校5日制と地域の課題を中心に—」、花城正美氏の「平成2年度の小浜公民館資料」は公民館資料に相当する原稿である。

仲盛・田代両氏の原稿は、竹富町公民館連絡協議会の実践発表大会で配布された資料（レジュメ）である。田代氏の発表は、学校5日制が導入される際（2002年）、地域での対応策が講じられたものであったが、制度の導入以前から既に公民館が中心となった文化活動が知られ、それは学校の枠を越えた広義の教育に値するものといえるだろう。

花城氏の原稿は、ご尊父・英行氏が平成2年度に小浜公民館長を務められたときの資料綴をもとにしたものである。これをみると、多岐にわたる情報が集中する公民館はいつの時代も暮らしの最前線であること、また公民館長がさまざまな役職・仕事をこなしていることが理解・納得できるのである。

ところで、今年度はNHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」の再放映の影響もあり、竹富町役場でも「小浜島」「ちゅらさん」に関する数件の問い合わせを受けた。2002年度の小浜公民館長・仲盛長儀氏もテレビ画面に映ることもあったが、『琉球新報』『南風』欄に当時連載された氏の一連のエッセイは小浜島を大いにアピールしたものであった。本号では、それに「小浜島—果報ぬ島・ちゅらさんの島—」と銘打ち、関連する写真を入れ、先述の発表原稿と合わせて編集した。

その他、「小浜島に関する資料」、崎原恒新氏の調査ノートを加えると、本号はさながら「小浜島特集」の様相を呈することにもなった。本号が公民館資料の意義を考えるだけでなく、「ちゅらさん」の背景に広がる、深遠なる小浜島の世界への誘いになれば幸いである。

（飯田泰彦）

2025年2月28日発行

竹 富 町 史 だ よ り

第55号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11-1

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp

